ツキノ木遺跡

－平成 29 年度　県営中山間総合整備事業　縄文の里地区
埋蔵文化財発掘調査報告書－

2019.3

茅野市教育委員会

序　　文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むことができます。

当市には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡や駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡、更には国宝土偶「縄文のビーナス」、「仮面の女神」を保有するなど、「縄文の里」として全国にその名を知られています。それらの縄文遺跡にかくれがちであった弥生時代から江戸時代の遺跡も、市街地周辺における近年の発掘調査の蓄積によって、各時代の生活の様相が明らかになりつつあります。

今回のツキノ木遺跡の発掘調査は、県営中山間総合整備事業縄文の里地区の圃場整備に伴うもので、長野県諏訪地域振興局からの委託を受けて行ったものです。茅野市としても久しぶりの大規模な発掘調査となり、調査期間も 4 か月に及びました。

ツキノ木遺跡には、これまでの八ヶ岳山麓にみられる縄文時代の遺跡と異なり、平安時代や中世の人々の痕跡が残されていました。こうした、より現代に近い人々の暮らしも、私たちの直接の祖先に近いことから関心を集め、開催した現地説明会には 50 名ほどの見学者が訪れ、説明に耳を傾けました。

この報告書には、そうした昔の人々の生活が記録されています。本書が研究者をはじめ、地域の皆さまに今後大いに活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力を賜りました地権者ならびに長野県諏訪地域振興局、調査に従事された作業員の皆さまに心からお礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月

茅野市教育委員会
教育長　山田利幸

例　言

1　本書は平成 29 年度に実施した県営中山間総合整備事業　縄文の里地区内に所在するツキノ木遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　ツキノ木遺跡の調査は、長野県諏訪地域振興局からの委託を受け、茅野市教育委員会が平成 29 年 7 月 3 日から平成 29 年 10 月 31 日まで実施した。
3　整理作業ならびに報告書作成は、平成 30 年 7 月 4 日から平成 31 年 3 月 10 日に実施した。
4　本調査に係わる出土品､諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵･保管している。報文中に掲載した写真のうち、ドローンによる空中写真は、山田善興氏によるものである。
5　発掘調査から報告書作成までに、長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課、長野県立歴史館、長野県考古学会、西山克己　白沢勝彦の諸氏からご指導、ご助言を頂いた。記して感謝する次第である。

凡　例

1　本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。

目　次

第 1 章　ツキノ木遺跡の位置と環境 …… 1
第 2 章　調査の経緯 …… 1
　第 1 節　調査に至る経緯…… 1
　第 2 節　調査の体制…… 3
　第 3 節　調査の経過…… 4
　第 4 節　調査区の設定…… 5
　第 5 節　調査日誌抄…… 5
第 3 章　遺構と遺物 …… 10
　第 1 節　住居址…… 13
　第 2 節　土坑…… 29
　第 3 節　竪穴…… 40
　第 4 節　墓坑…… 42
　第 5 節　ピット…… 43
第 4 章　まとめ…… 54
抄録

第 1 章　ツキノ木遺跡の位置と環境

ツキノ木遺跡 (299) は、茅野市玉川神ノ原に所在する。茅野駅からは、東へ 2.5㎞の位置にある。茅野駅東口から茅野市街を経て、粟沢橋で上川を渡り、玉川粟沢を過ぎ神ノ原交差点の手前の住宅街を南へ入ったところにある。

八ヶ岳西麓を流下する河川は、大きなものとして北側の柳川、南側の弓振川があるが、柳川は北に直線距離で 1.2㎞、弓振川は南へ 1㎞と離れている。その間にも北 800 mに歳野川、南 500 mに川久保川がある。現在は江戸時代後期に開削された堰が遺跡のすぐ南を流れているが、それ以前の水利用としては、川久保川が最も近いものである。

当地区の北と東には、県道上槻木矢ケ﨑線・県道神ノ原青柳停車場線があり、道路周辺には古くからの集落が営まれており、遺跡の東側には神之原公民館や JA 信州諏訪玉川店がある。本遺跡の北側は、その古くからある集落の南の農地を造成した新興住宅の建築が進んでおり、調査期間中にもいくつかの個人住宅の建築が行われているなど、開発の進んでいる地域である。

また、南側の一段高い尾根筋は、上川にかかる公園大橋が昭和 51 年に竣工し、それに先立って計画された運動公園は、昭和 48 年に起工され野球場を最初とし、プール、総合体育館、陸上競技場、徐々に様々な設備を充実させていった。茅野市運動公園を経て長峰と神ノ原荒神地籍とを結ぶ道路が直結整備されたことにより、駅からのアクセスが格段に向上した。その後、諏訪中央病院が移転新築されたこともあり、玉川小学校に至る市道周辺は、古くからの集落に新しい住宅が入り混じる、開発の進んだ地域となっている。その尾根とは急峻な斜面により隔てられており、一段低い谷部分は水田として利用されている。

一方、遺跡の西側は、東側の県道から約 800 m西にある神ノ原荒神地籍にある東海大学諏訪高等学校までの約 18ha が、農地として利用されてきた。この広大な範囲に県営圃場整備事業が計画された。

ツキノ木遺跡はこの圃場整備事業地の北東隅で、南向きで西へなだらかに傾斜する台地上にあり、遺跡の標高は 865 mから 869 mである。

第 2 章　調査の経緯

第 1 節　調査に至る経緯

玉川神ノ原の広田地区で、県営の圃場整備事業が計画された。この地区にツキノ木遺跡 (遺跡番号 299) が登録されていることから、長野県諏訪地方事務所農地整備課 (現　長野県諏訪地域振興局) と協議を行い、平成 27 年に遺跡の試掘調査を行うこととなった。調査個所は地権者の同意が得られた 2 個所の休耕地である。調査地点は、東西に走る尾根の間にある谷地形となっている箇所で、重機により南北に 3 本ずつ、計 6 本のトレンチ調査を行った。試掘調査の結果、中世の青磁破片が 1 点出土しただけで、遺構の検出はなく、北側の堰よりも低い土地であることから、調査中に水が湧き出してくる状態であった。遺物の出土はあったものの、遺跡の中心はむしろ北側の尾根である可能性が高いことから、遺跡の範囲変更を長野県教育委員会に届け出 (平成 28 年 11 月 18 日付　28 教文第 136 号)、長野県教育委員会より承認された (平成 28 年 12 月 6 日付　28 教文第 545 号)。これをもって、その北側の尾根について、再度開発者と保護協議を行った。その結果、一段高い北側の尾根は、圃場整備事業によって削平される場所であることから、改めて平成 28 年度に試掘調査を行い、その結果を待って再度保護協議を行うこととなった。

平成 28 年度の試掘調査は、遺跡として新たに括った中央やや西側の休耕地で、畑として利用されてきた場所で行った。前年度と同じように重機を用いて、南北に 2 本のトレンチ調査を行ったが、尾根の頂部に近いところから柱穴状の掘り込み 2 個所が検出された。また、遺物は中世の青磁破片が 1 点出土しただけであった。

試掘調査の結果をもって再度開発者と保護協議を行い、遺構の分布は浅く、遺物には縄文時代のものがなく新

第１図　ツキノ木遺跡位置図（1/100,000）

しいこと等を説明した。開発者からは、尾根部分は削平する場所であることもあり、土木工事の途中で新たな遺構が検出され工事を中断するよりも、遺跡全面を事前に発掘調査してほしいとの申し出があった。そこで、平成29年度の受託事業として予算化を行い、発掘調査を実施することとなった。

調査費用は、7,600㎡の表土剥ぎと基準杭測量を行うための費用を見込んだため、総額で12,400,000円となった。その内の文化財保護の対象となる農家負担分、事業費の8％については市費と国庫補助金、残りの92%については長野県諏訪地域振興局からの委託金である。また、報告書作成については、翌年度改めて契約をすることとした。

平成29年度の最終の発掘費用の清算は年度末に行い、調査費用5,110,540円となり、その内の92％にあたる4,701,697円を長野県諏訪地域振興局からの委託金とし再契約を行った。残りの408,843円のうち50％にあたる204,421円が国庫補助、204,422円が市費である。

平成30年度は、発掘調査報告書作成費用として1,631,640円を計上し、その92％にあたる1,472,00円を委託金として契約を行っており、年度末に清算、再契約を行う予定である。

参考文献

塩澤恭輔　2017.3 『市内遺跡10　－平成27年度　埋蔵文化財発掘調査報告書－』茅野市教育委員会
塩澤恭輔　2018.1 『市内遺跡11　－平成28年度　埋蔵文化財発掘調査報告書－』茅野市教育委員会

第2節　調査の体制

発掘調査は茅野市教育委員会事務局 文化財課が実施した。組織は下記のとおりである。

① 調査主体者 教育長　山田利幸
② 事　務　局 生涯学習部長　平出信二
③ 文化財課・尖石縄文考古館
　守矢昌文（文化財課長平成　30年3月まで・尖石縄文考古館長）
　両角勝元 (文化財課長平成　30年4月～)
　小池岳史（考古館係長）
　正木美香（尖石史跡整備担当　平成30年3月まで）
　小林健治（文化財係長）
　山科　哲　大月三千代　小林深志　鵜飼幸雄
④ 調査担当　小林深志　鵜飼幸雄　塩澤恭輔（平成27・28年度試掘調査担当）
⑤ 発掘調査参加者
　補助員　酒井みさを　大勝　弘子　武居八千代　立岩貴江子
　作業員　赤羽　千雲　北澤　俊弘　柳沢　省一　山田　善興
　発掘体験ボランティア　野﨑順子

第３節　調査の経過

ツキノ木遺跡の調査予定面積は、7,600㎡と広いことから、表土剥ぎはバックホー２台と、クローラーダンプ１台を導入し、遺跡の西側に運搬をすることとする。

表土剥ぎは７月３日から行った。表土剥ぎを開始してしばらくすると、平安時代の灰釉陶器埦の半完形品が出土し、遺構の存在が確実視されるなど、今後の成果に期待がもたれた。

作業員による遺構確認作業は、７月５日から表土剥ぎと並行し、表土剥ぎが終わった南東隅から行った。表土剥ぎ初日に灰釉陶器埦の出土した個所は、暗褐色土の大きな掘り込みが確認でき、住居址の存在が明らかとなった。

当初、前年の試掘調査の結果から、表土層は 30㎝ほどと考えていた。南東隅から表土層を除去し始めてみると、やはり 30㎝ほどの表土層の下に、ローム層と見られる黄褐色土が現れたため、一旦その面で遺構の確認を行うこととした。しかし、その当初ローム層と考えた土層はブロック状の堆積で、明らかに通常の堆積状態と異なっており、開田のため北側の尾根の高い個所を削り、埋めた土である可能性があることが推測された。そこで、調査区の南東隅で１ｍ四方の深掘りをしたところ、約 30㎝の表土層 (水田の耕作土) の下に 65㎝の埋土があり、その下に開田前の旧表土である黒色土が 25㎝あり、さらにその下がローム層となっていた。黒色土とその下のローム層との間には漸移層はなく、明確に分層できる。これは、開田前の畑の耕作により、遺物包含層や漸移層が削平されてしまった状態と考えられた。

開田のためのローム層の削平は、東側の三枚の水田として利用されていた範囲に及び、南北では調査区の北側三分の二以上、東西では東側の約半分に及ぶ。ローム層上面を削平してある範囲を調査区のグリッドで示すと、南北はＧラインまで、東西は６ラインまでにあたる。

表土剥ぎは、当初、東側から西側へ向かって行っていたが、調査区の北側は大きく削平され、多くの遺構の検出が望めなさそうであることから、南側に重点を置き、遺構の検出作業を行っている間に北側の表土剥ぎを行うという手順で行うこととした。

一方、調査区の西側は、畑として利用されており、旧地形がある程度残されていると考えられるが、表土層の直下が直ちにローム層漸移層となっており、遺物包含層は確認できない。斜面北側の土を南側に移動し、できるだけ耕作面を水平にする行為は行われているようである。また、南西側には尾根に直行する谷が入っていたが、これも埋められていた。

開田によるローム層の削平が行われた調査区北西の範囲には、１ｍを超える礫が入る穴が多数見つかっている。中には礫の上面が水平となっているものがみられたため、建物の礎石になるのではないかとも考えられたが、配置が不規則であり、礫の上面が水平でないものの方が多い状況から、開田による削平の際、礫の運搬が難しく、脇に穴を掘って礫を落とし、耕作面を平らにしていった痕跡であろうと判断した。

その削平された面からも、開田時以前と考えられる土坑がいくつか検出されている。上面が削平されており、本来の規模を推測することは難しいが、僅かに残る痕跡を確認できたことは成果であった。遺構の検出が期待された南側斜面も、南側で検出された２号住居址は、開田前に耕作されていた小さな畑のため、西側が削平されているなど、遺構の遺遺存状態はあまり良い状態ではなかった。

調査区の西側で、畑として利用されていた範囲も、表土剥ぎを行うと直ちに住居址の床とカマドの遺物が検出されるなど、遺構の遺存状態はあまり良好ではなかった。

重機による表土剥ぎは、７月 21 日までで終了した。

遺構の掘り下げは、７月 20 日より開始する。また、８月からは、作業員を増員して遺構の確認作業と掘り下げを行った。途中、市内遺跡の緊急発掘調査が入るなど中断はあったが、予定通り 10 月末で現場での作業を終了した。

調査終了間近の 10 月 21 日には、この発掘調査を市民に公開するため、地元の神ノ原区民を中心に、約 50 名を対象とした遺跡説明会を開催した。

第４節　調査区の設定

調査区の基準杭設置と水準点設置作業は、表土剥ぎが終了した７月 21 日から委託事業として行った。

調査区の設定は世界測地系第Ⅷ系を基準とし、201(X=-694.189、Y=-28687.822)・202(X=-696.611、Y=-28759.944) の２個所の基準杭を設置し、これを基準としてグリッド杭を打設した。グリッドは、北東隅の A1(X=-640、Y=-28670) から西へアルファベッドで A から N まで、北から南へ数字で１から 10 まで 10 mピッチで設定した。

また、一つのグリッドが大きいことから、遺構の位置を表す際や遺構外の遺物の取り上げ等には、10 m四方のグリッドを２m四方に区切り、東から西へアルファベッドの小文字で a から e まで、北から南へ数字で１～５までで表し、２m四方のグリッドは A1a1 などと呼称することとした。

当初、調査区全面に遺構が分布することを想定し、４mピッチで杭打ち作業を行う予定であったが、表土剥ぎの結果、遺構の分布が南側斜面に集中し、北側は分布が薄いことから、東西の６列と７列に 10 mピッチで杭を打ち、必要に応じてその南北にグリッド杭を設置した。

第５節　調査日誌抄

平成 29 年７月３日 (月)　晴れ　本日よりバックホウ２台が入り、表土剥ぎを開始する。最初北側の駐車場とプレハブ設置予定個所の整地と、クローラーダンプの道づくり。午後より東側から表土剥ぎに入る。尾根の中央は水田にするために削平・整地されており、表土を剥ぐとハードロームとなる。南側で、黒色土の落ち込みのある個所があり、灰釉陶器片が出土する。

平成 29 年７月４日 (火)　雨　梅雨前線及び台風３号の影響で雨となり、表土剥ぎ作業は中止する。前日整地した駐車場予定地が雨でぬかってしまうため、砕石を投入することとし、諏訪地域振興局に連絡し、許可を得る。東城組に手配を依頼。

平成 29 年７月５日 (水)　晴れ　前日の雨でぬかるんでいるため、重機の作業は中止。本日より作業員が入る。灰釉陶器の出た周辺が住居址になりそうで、精査を行う。南側で一旦ローム面が出たとしたところが、埋土の可能性があり、南の隅を掘り下げる。すると、65㎝ほどの盛土の下に 25㎝の黒色土が現れ、さらにその下にローム面が検出された。明日以降、再度重機を入れて掘り下げを行う予定。

図版１　重機による表土剥ぎ作業

平成 29 年７月６日 (木)　晴れ　重機による表土剥ぎ。排土の運び出し運搬。前日盛土であることが確認された南東部分の盛土部分の掘削。住居址１軒を検出する。作業員による遺構の検出作業。諏訪地域振興局農地整備課玉村氏見学。

平成 29 年７月７日 (金)　晴れ後大雨　重機による表土剥ぎ。当初､東側より全面を剥いでいく予定だったが、中央部分から北は削平されており、遺構の検出が見込めないことから、南側の斜面を優先的に西端まで表土を剥いでいくことに変更する。作業員による遺構確認は、２軒目の西側を精査する。当初３軒目かと思われた西側は、古い畑の段差であること

図版２　調査区南側の埋土

が確認され、黒色土を人力により取り除く作業を行った。作業終了直前に大雨となり作業を中止する。

平成 29 年 7 月 10 日 (月)　晴れ　重機による表土剥ぎ。作業員による遺構確認。新たな遺構の確認なし。

平成 29 年 7 月 11 日 (火)　晴れ　重機による表土剥ぎ。作業員による遺構確認。土坑などの新たな遺構を確認する。

平成 29 年 7 月 12 日 (水)　晴れ　重機による表土剥ぎ。作業員による遺構確認は、休養のため中止とする。

平成 29 年 7 月 13 日 (木)　晴れ　重機による表土剥ぎ。作業員による遺構確認は、一本木遺跡の発掘調査のため、行わなかった。

平成 29 年 7 月 14 日 (金)　曇り一時雨、のち晴れ　重機による表土剥ぎ。作業員による遺構確認は、一本木遺跡の発掘調査のため、行わなかった。

平成 29 年 7 月 15 日 (土)　晴れ　重機による表土剥ぎ。

平成 29 年 7 月 17 日 (月)　晴れ　重機による表土剥ぎ。

平成 29 年 7 月 18 日 (火)　晴れ　重機による表土剥ぎ。

平成 29 年 7 月 19 日 (水)　晴れ　重機による表土剥ぎ。

平成 29 年 7 月 20 日 (木)　晴れ　重機による表土剥ぎ。西端で、一辺２ｍほどの小さな住居址を確認する。北西隅でカマドと土師器坏。作業員による遺構の掘り下げに入る。仮設テントを設置する。両角測量による基準杭設置。

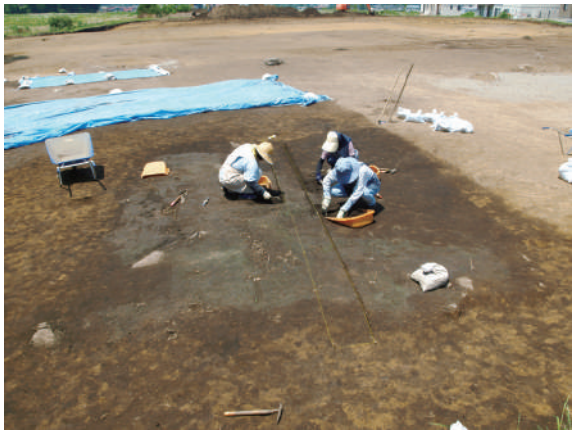
平成29年7月21日(金)　晴れ　重機による表土剥ぎは、本日で終了する。作業員による遺構の掘り下げ。東の端で検出した住居を掘り下げる。東側でカマドを検出。ちょうど煙り出しの穴付近に灰釉陶器が位置する。両角測量による基準杭測量。

平成 29 年 7 月 24 日 (月)　曇り　作業員による遺構掘り下げ。1 号住居址と命名した住居址は、重複する可能性があるが、はっきりしない。灰釉陶器・土師器が数点出土する。測量会社による杭打ち作業。

平成 29 年 7 月 25 日 (火)　雨　雨のため作業中止。

平成 29 年 7 月 26 日 (水)　曇りのち雨　休養のため作業中止。プレハブと仮設トイレの手配。

図版３　重機による表土剥ぎ作業



図版４　1 号住居址掘り下げ開始

図版５　測量会社による杭打ち作業

平成 29 年 7 月 27 日 (木)　曇りのち晴れ　1 号住居址掘り下げ。

平成 29 年 7 月 28 日 (金)　曇りのち晴れ　中ッ原縄文公園・永明寺山古墳等の草刈り作業のため、現場作業を中止する。

平成 29 年 7 月 31 日 (月)　晴れ　1 号住居址の遺物出土状態等の写真撮影のため清掃作業。写真撮影後、平面図作成のためのグリッド設定。水糸張り。1 号住居址遺物出土状態平面図作成開始。遺跡周辺の草刈り作業。

平成 29 年 8 月 1 日 (火)　曇り　本日より、男性作業員２名が入る。1 号住居址の遺物出土状態実測図作成と取り上げ作業。北東の掘り込みについて、半裁を開始する。山田善興さんがドローンを持参し、空撮を行う。

平成 29 年 8 月 3 日 (木)　曇り　1 号住居址は床面の土坑の掘り下げを行う。P3 より鉄滓が 1 点出土する。調

査区北東の落ち込みを半裁により掘り下げる。

平成 29 年 8 月 4 日 (金)　晴れ　1 号住居址は床面の土坑の掘り下げを行う。P5・P7・P8。P5 と P7 は切り合っており、P7 が新。調査区北東の落ち込みを半裁により掘り下げる。ほとんどが礫の抜き取り痕。諏訪地域振興局玉村氏見学。

平成 29 年 8 月 7 日 (月)　曇りのち雨　1 号住居址のカマド断面図作成。床下土坑掘り下げ。調査区北東の遺構確認調査。台風 5 号の影響で風が強く、明日も雨となる予報のため、テントなど雨と風の対策等を行い、終了する。明日も昼ころまで台風の影響がありそうなので、作業は中止とする。

平成29年8月8日(火)　雨　台風5号の影響で雨となり、作業は中止とする。

平成 29 年 8 月 10 日 (木)　晴れのち曇り　1 号住居址は、カマド周辺の掘り下げと実測図作成。遺構の検出作業と掘り上げ。

平成 29 年 8 月 17 日 (木)　晴れのち曇り　1 号住居址の貼床を剥ぎ取り、床下土坑の検出を行う。遺構確認作業。

平成 29 年 8 月 18 日 (金)　雨　雨のため、作業中止。室内にて、遺物の洗浄を行う。

平成 29 年 8 月 21 日 (月)　晴れ　1 号住居址の完掘平面図とエレベーション図作成。1 号土坑・2 号土坑の平面図作成。3 ～ 5 号土坑断面図作成。掘り下げ・完掘。2 号住居址掘り下げ開始。

平成 29 年 8 月 22 日 (火)　晴れ　2 号住居址掘り下げ。遺構平面図作成。

平成 29 年 8 月 23 日 (水)　晴れ　作業員の休養日で、現場作業は休み。

平成 29 年 8 月 24 日 (木)　晴れ　2 号住居址土層断面図作成。遺構確認調査。

平成 29 年 8 月 25 日 (金)　曇りのち雨　2 号住居址全景写真撮影。遺構確認調査。山田善興さんによるドローンによる空撮。

平成 29 年 8 月 28 日 (月)　晴れ　遺構確認調査。遺構掘り下げ。

図版 6　1 号住居址カマド
カマドの上に灰釉陶器が乗っている。表土剥ぎ初日に最初に出土した遺物

図版 7　1 m近い大礫が穴に埋まっている

図版 8　2 号住居址をドローンで撮影

平成 29 年 9 月 6 日 (水)　雨　作業中止。

平成 29 年 9 月 7 日 (木)　雨　遺構の検出作業。雨が強くなり、午前中で作業を終了する。

平成 29 年 9 月 8 日 (金)　晴れ　遺構の検出作業。しっかりした柱穴が検出され、周辺の精査を行う。野崎さんが午後発掘の体験。

平成 29 年 9 月 11 日 (月)　曇り　遺構の検出作業と掘り下げ。

平成 29 年 9 月 12 日 (火)　雨　作業中止。

平成 29 年 9 月 19 日 (火)　晴れ　遺構の検出作業。東から四段目に入る。

平成 29 年 9 月 21 日 (木)　晴れ　遺構の検出作業。昨年度の試掘調査トレンチを掘り返す作業を行う。
平成 29 年 9 月 25 日 (月)　晴れ　遺構の検出作業。2 号住居址遺物出土状態の写真撮影と図面作製。ドローンによる空撮。
平成 29 年 9 月 26 日 (火)　晴れ　2 号住居址のカマド調査
平成 29 年 9 月 27 日 (水)　曇り　2 号住居址の床下土坑掘り下げ。遺跡北側中央の土坑で人骨が出土し、茅野警察署に連絡。刑事課の職員 3 名が来跡。野崎さん、午後発掘体験。
平成29年9月28日(木)　雨　雨のため､作業を中止する。
平成 29 年 9 月 29 日 (金)　晴れ　2 号住居址完掘状態の平面図作成。墓坑の掘り下げ。茅野警察署の刑事課後藤さんはじめ鑑識 2 名、長野県警捜査 1 課 3 名、茅野警察署刑事課長、長野県諏訪地域振興局玉村さん来跡。骨は、旧土地所有者と連絡を取り、その結果によって県地域振興局の方で処理してくれることとなる。ドローンによる空撮。
平成 29 年 10 月 2 日 (月)　曇り後雨　2 号住居址完掘状態平面図作成。遺構検出と掘り下げ。
平成 29 年 10 月 3 日 (火)　晴れ　遺構確認調査。
平成 29 年 10 月 4 日 (水)　晴れ　遺構確認調査。
平成 29 年 10 月 10 日 (火)　晴れ　遺構確認調査。遺構平面図作成。テント引っ越し。
平成 29 年 10 月 11 日 (水)　晴れ　遺構確認調査は 3 号住居址まで達する。調査区南側の樹木伐採作業が行われる。
平成 29 年 10 月 12 日 (木)　曇り　遺構確認調査は西端まですべて終了する。遺構掘り下げ。1 号竪穴のエレベーション図作成。これまでに実測した柱穴状遺構のレベル計測。
平成 29 年 10 月 18 日 (水)　曇り　3 号住居址の掘り下げに入るが、覆土が薄く、ただちに床面となる。遺構掘り下げ。検出ピット平面実測図作成。
平成 29 年 10 月 20 日 (金)　曇り時々雨　墓坑の骨を取り上げ、諏訪地域振興局とほ場委員に引き渡し。キセル・古銭も。遺構掘り下げ。方形竪穴の土壌観察をした後に完掘。ピット等の平面図作成とレベル計測。
平成 29 年 10 月 21 日 (土)　曇り　現地説明会を開催。約 50 名参加。
平成 29 年 10 月 24 日 (火)　曇り　遺構掘り下げ。遺構平面図作成。
平成 29 年 10 月 26 日 (木)　晴れ　遺構の掘り下げと写真撮影。
平成 29 年 10 月 27 日 (金)　晴れ　遺構の掘り下げと写真撮影。
平成 29 年 10 月 30 日 (月)　晴れ　強風と寒さで作業はかどらず。遺構の実測図作成。
作業終了に向け、機材の撤収作業。

図版 9　ド 2 号住居址カマドと出土遺物

図版 10　墓坑から人骨出土

図版 11　ドローンによる空撮 (西から八ヶ岳を望む)

平成 29 年 10 月 31 日 (火)　晴れ　寒さのため、作業はかどらず。遺構実測図作成。機材の撤収作業。現場でのすべての作業を終了する。

図版 12　ドローンによる空撮 (南西から蓼科山を望む)

図版 13　遺跡遠景 (南から)

図版 14　現地説明会

図版 15　現地説明会 (出土遺物)

第３章　遺構と遺物

当初、前年の試掘調査の結果から、表土層は 30㎝ほどと考えていた。南東隅から表土層を除去し始めてみると、やはり 30㎝ほどの表土層の下に、ローム層と見られる黄褐色土が現れたため、一旦その面で遺構の確認を行うこととした。しかし、その当初ローム層と考えた土層はブロック状の堆積で、明らかに通常の堆積状態と異なっており、開田のため北側の尾根の高い個所を削り、埋めた土である可能性があることが推測された。そこで、調査区の南東隅で１ｍ四方の深掘りをしたところ、約 30㎝の表土層 (水田の耕作土) の下に 65㎝の埋土があり、その下に開田前の旧表土である黒色土が 25㎝あり、さらにその下がローム層となっていた。黒色土とその下のローム層との間には漸移層はなく、明確に分層できる。これは、開田前の畑の耕作により、遺物包含層や漸移層が削平されてしまった状態と考えられた。

開田のためのローム層の削平は、東側の三枚の水田として利用されていた範囲に及び、南北では調査区の北側三分の二以上、東西では東側の約半分に及ぶ。ローム層上面を削平してある範囲を調査区のグリッドで示すと、南北は G ラインまで、東西は６ラインまでにあたる。

一方、調査区の西側は、畑として利用されており、旧地形がある程度残されていると考えられるが、表土層の直下が直ちにローム層漸移層となっており、遺物包含層は確認できない。斜面北側の土を南側に移動し、できるだけ耕作面を水平にする行為は行われているようである。また、南西側には尾根に直行する谷が入っていたが、これも埋められていた。

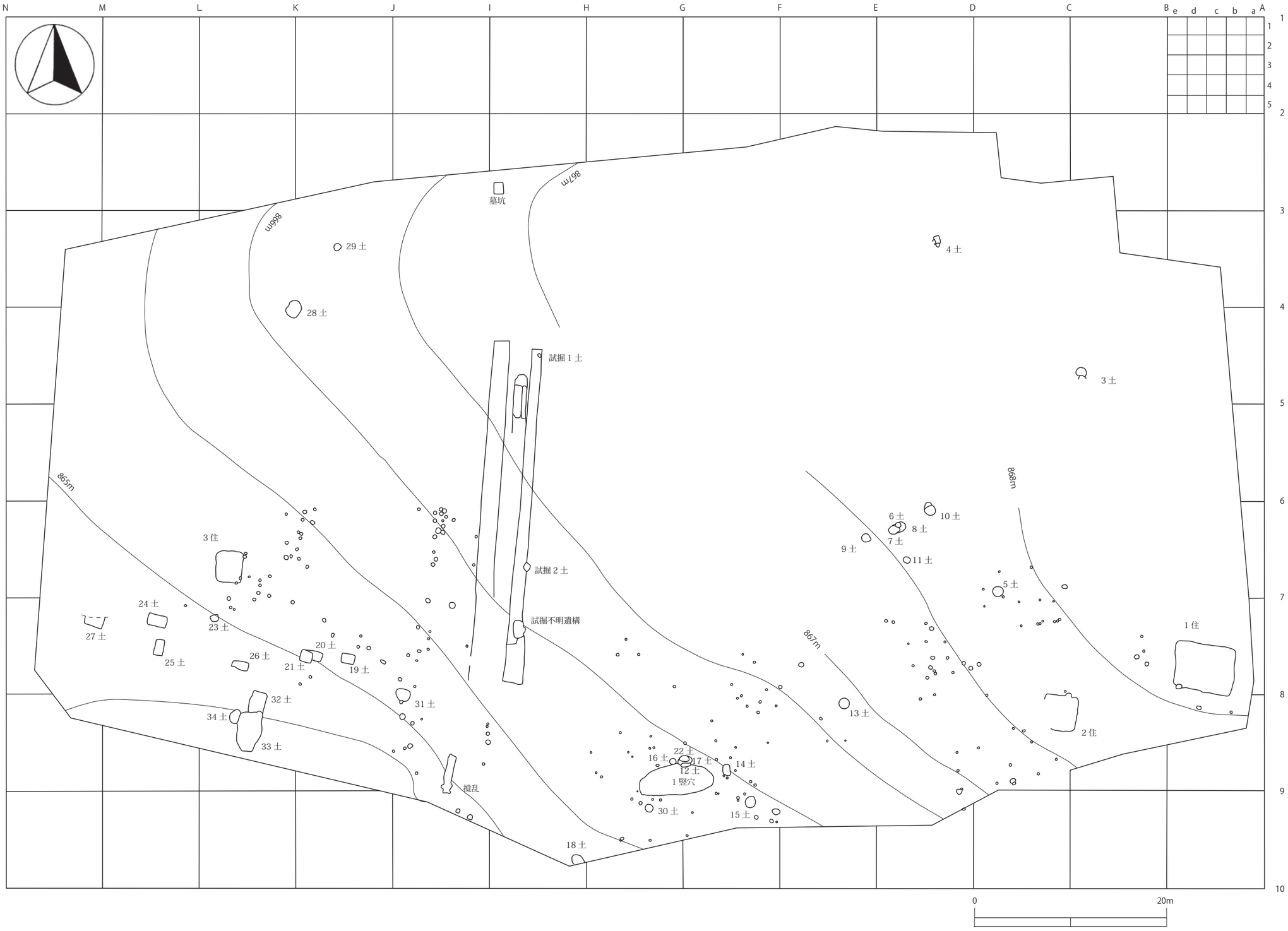
開田によるローム層の削平が行われた調査区北西の範囲には、１ｍを超える礫が入る穴が多数見つかっている。中には礫の上面が水平となっているものがみられたため、建物の礎石になるのではないかとも考えられたが、配置が不規則であり、礫の上面が水平でないものの方が多い状況から、開田による削平の際、礫の運搬が難しく、脇に穴を掘って礫を落とし、耕作面を平らにしていった痕跡であろうと判断した。

その削平された面からも、開田時以前と考えられる土坑がいくつか検出されている。上面が削平されており、本来の規模を推測することは難しいが、僅かに残る痕跡を確認できたことは成果であった。遺構の検出が期待された南側斜面も、南側で検出された２号住居址は、開田前に耕作されていた小さな畑のため、西側が削平されているなど、遺構の遺存状態はあまり良い状態ではなかった。

調査区の西側で、畑として利用されていた範囲も、表土剥ぎを行うと直ちに住居址の床とカマドの遺物が検出されるなど、遺構の遺存状態はあまり良好ではなかった。

ツキノ木遺跡で検出された遺構は、住居址３軒、土坑 32 基、墓坑１基、竪穴状遺構１基、小ピット 203 基である。このうち、遺物が出土し、時期の明らかな遺構は、平安時代の住居址が３軒、近世の墓坑が１基、同じく近世の土坑が２基である。縄文土器片１点を出土した土坑もあるが、遺跡全体の縄文時代の遺物が極めて少ない中での出土であり、遺構の時期とすることには躊躇するものがある。

本遺跡を発掘する契機となった中世の遺構は、出土遺物からは判断できないが、調査区の西側で検出された多くの方形の土坑がこれにあたるのではないかと考えている。また、多数のピットもこれにあたるのではないかと検討したが、明確に建物址になるといえるものはなかった。


N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
e
d
c
b
a
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
墓坑
87.7m
86.6m
29 土
28 土
4 土
試掘 1 土
3 土
865m
868m
3 住
6 土
10 土
8 土
7 土
9 土
11 土
試掘 2 土
5 土
24 土
試掘不明遺構
1 住
27 土
23 土
20 土
25 土
26 土
21 土
19 土
867m
32 土
31 土
13 土
34 土
33 土
2 住
22 土
16 土
17 土
14 土
12 土
1 竪穴
撹乱
30 土
15 土
18 土
0
20m

第 1 節　住居址

検出した住居址は、すべて平安時代のもので 3 軒ある。2 軒が調査区の東側、1 軒が調査区の西側で検出できた。調査区の西側は、造成により一段低くなっており、八ヶ岳山麓の他の遺跡で見られるような、住居が点々と続いていた可能性もあるが、すでに削平され消滅してしまっているであろう。

1 号住居址 (第 3 図、図版 16)

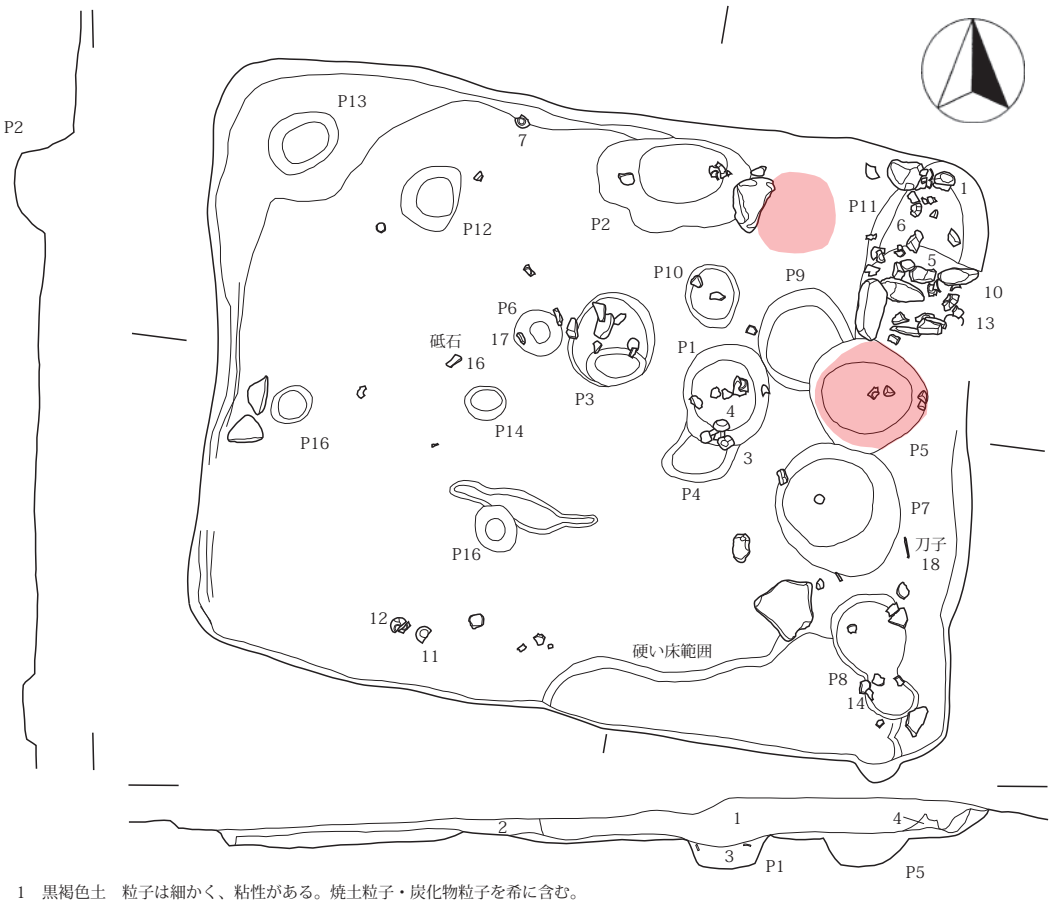
調査区東側隅の A7b3 から A7e5 に位置する。表土剥ぎの際、灰釉陶器の埦が出土したことにより、精査したところ住居址となった。南壁が傾斜により削られ、壁が見られないが、平面形態は東西 6 m、南北 5 mほどの隅丸長方形となる。壁高は最も高いところで 25㎝を測る。

カマド (第 4 図、図版 17・18）は東壁の北隅にある。表土剥ぎの際に出土した灰釉陶器の皿 (第 5 図 10、図版 31-10) は、このカマドの上に乗る形で出土した。天井石や袖石は床面から浮いており、中に焼土が混じり壊された状態であった。また、両脇には礫を抜き取った痕跡が認められる。しかし、火床面と考えられる位置に焼土は検出されない。カマドからは甕ではなく、土師器の坏などが出土している。

床面が焼け、焼土となっているのは北壁の東隅で、8㎝の厚さがあった。カマドの右脇の P5 には焼土のブロックが入っている。

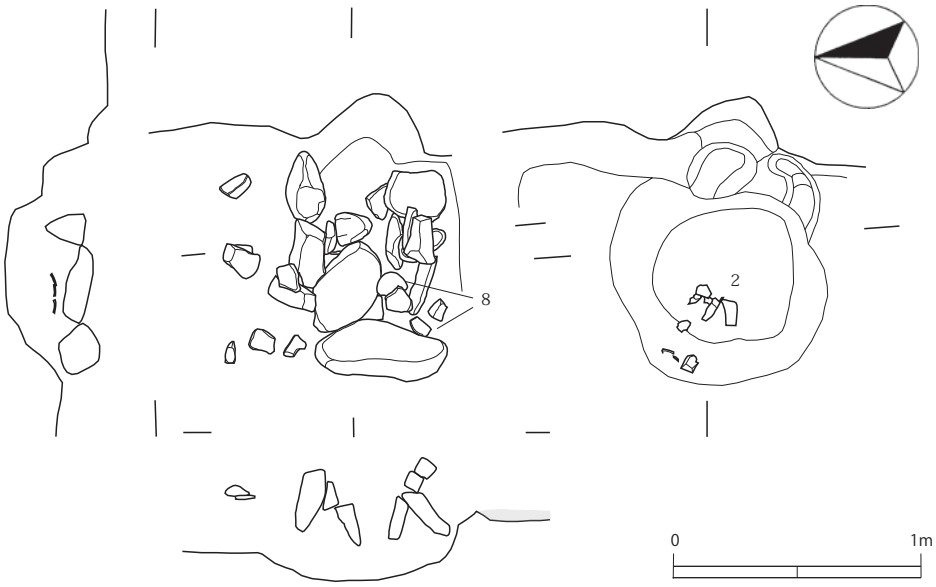
周溝は西壁で一部が検出されただけである。

柱穴と考えられるものは、住居内外に検出されていない。



1　黒褐色土　粒子は細かく、粘性がある。焼土粒子・炭化物粒子を希に含む。
2　暗褐色土　粒子は細かく、粘性がある。3 ～ 5 ㎝の濁ったロームブロックを含む。
3　暗褐色土　粒子は細かく、粘性がある。細かいローム粒子・焼土粒子を含む。
4　暗褐色土　粒子は細かく、粘性がある。ローム粒子を多く含む。北側にカマドがあるためか、焼土粒子も多い。

第 3 図　1 号住居址 (1/60)



第 4 図　1 号住居址カマド (1/40)

床下土坑 (ピット) は大小 16 基が検出された。

P1　住居址中央よりやや東によったところに位置する。北側に貼床がみられる。南側に貼床のない P4 があり、切られている。平面形は南北に長い長円形で、長径 80㎝、短径 70㎝を測る。底面形はほぼ円形で、径 50㎝を測る。深さは 30㎝。覆土内より土師器坏の完形品が出土。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、粘性がある。細かいローム粒子・焼土粒子を含む。

P2　北壁際中央よりやや東によった位置にある。貼床は認められない。平面形は東西に長い不整形で、長径 125㎝、短径 75㎝、底面形は長円形で、長径 70㎝、短径 45㎝を測る。断面形は、北壁の立ち上がりは直立気味であるが、東西南壁はなだらかな皿状となる。深さは 26㎝を測る。覆土は暗褐色土の単一層である。粒子は細かく、微細～ 5㎜のローム粒子が下層に多い。覆土内より土師器坏の半完形品が出土している。

P3　住居址の中央よりやや北側にある。平面形は長円形で、長径 75㎝、短径 67㎝、深さ 30㎝を測る。上面に床面より一段低くなっている貼床がある。覆土は 2 層に分かれ、上層は黒色土、下層は暗褐色土。どちらにも焼土が混じる。覆土内にこぶし大の礫が入る。上層から鉄滓が 1 点出土した他、土師器坏片が出土している。壁の下半と底面に 3 ～ 5㎝大の硬い土のブロックがあるが、壁面を固めたような出方ではない。南側に一段深い掘り込みがあるが、新旧関係が不明のため、同一の土坑として扱った。

P4　P1 の南に位置し、P1 を切っていることから、本址の方が新しい。貼床はない。平面形態は不明である。深さ 20㎝を測る。

P5　東壁際、カマドの右脇に位置する。平面形はほぼ円形で、径 85 ～ 95㎝、断面形はタライ状で、深さは 20㎝ほどである。覆土は暗褐色土の単一層で、貼床は見られない。2㎝大の焼土ブロック・微細な焼土粒子とローム粒子を含む。P7 と重複し、P7 が新。上面で土師器高台付坏片が出土しているが、住居址床面からの出土で、土坑に伴うものではない。

P6　住居址のほぼ中央に位置する。径 40㎝、深さ 27㎝の柱穴状の掘り込みである。貼床はない。覆土の中ほどから、自然礫による砥石が出土している (第 6 図 17、図版 31-17)。

P7　平面形はほぼ円形で、長径 110㎝、短径 100㎝を測る。底面形は円形で、北西に寄っている。断面形はタライ状で、深さ 30㎝を測る。沈んだ貼床がある他、覆土内に貼床の塊が入る。覆土は黒褐色土で、粒子は細かいが粘性はない。1㎝ほどのロームブロックを含む。P5 と重複し、P7 が新。

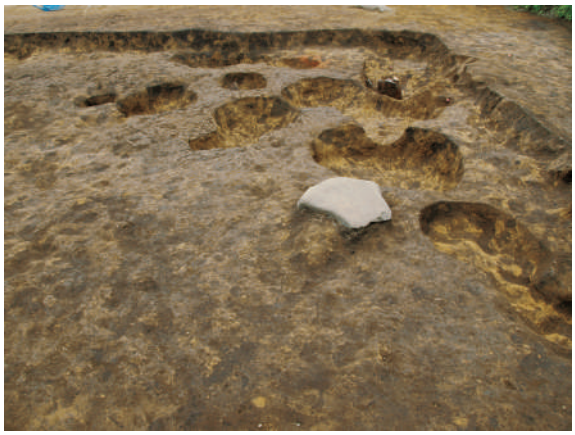
P8　住居の南東隅にある。平面形は双円状で、径 60 × 70㎝の穴と 35 × 50㎝のピットが重複しているのであ

図版 16　1 号住居址 (南から)

図版 17　1 号住居址カマド掘り下げ前

図版 18　1 号住居址カマド

図版 19　1 号住居址北東隅



図版 20　1 号住居址北東隅の床下土坑

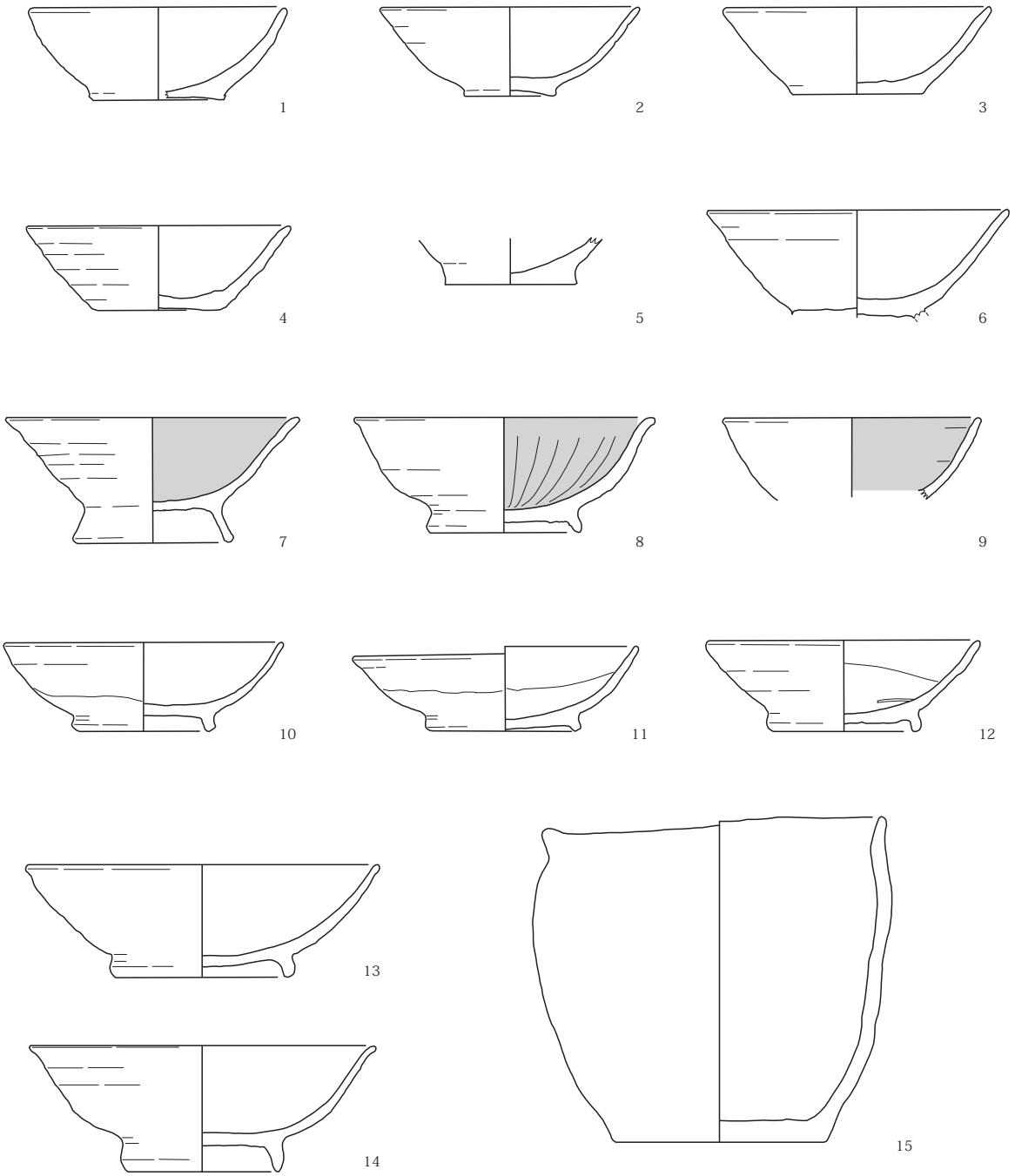
ろうが、深さ 12㎝ほどの底面のレベルが同じで、覆土にも違いが見られなかった。覆土は暗褐色土の単一層で、粒子は細かいが粘性はない。微細な焼土粒子と炭化物粒子を含むが、焼土は見られない。貼床はない。

P9　東壁北端にあるカマドの前面にある。平面形態はほぼ円形で、径 80㎝を測る。深さは 28㎝ある。南西側で P5 と重複しているが、本址の上層に貼床があり P5 に貼床がないことから本址の方が古いと考えられる。

P10　P9 の西にある。平面形態は長円形で、長径 50㎝、短径 45㎝を測る。深さは 13㎝ほどで、底面から礫が 2 点出土している。貼床はない。

P11　カマドの北側、住居址の北東隅にある。床面からの深さは 10㎝ほどである。

P12　住居址の北西にある。平面形態は東壁がやや直線状となる長円形で、長径 55㎝、短径 45㎝を測る。底面形はほぼ円形で、深さは 40㎝ある。



第 5 図　1 号住居址出土遺物 (1)(1/3)

P13　住居址の北西隅にある。平面形態は長円形で、長径 60㎝、短径 45㎝を測る。深さは 12㎝ほどである。
P14　平面形態はほぼ円形で、規模は径 30 ～ 35㎝、深さは 13㎝である。
P15　平面形態はほぼ円形で、規模は径 35 ～ 40㎝、深さは 33㎝である。
P16　平面形態はほぼ円形で、規模は径 30 ～ 35㎝、深さは 12㎝である。

出土遺物 (第 5・6 図、図版 31)

出土遺物には、土師器、灰釉陶器、砥石、刀子、銅製品、鉄滓などがある。

1　土師器の坏で、口径 12㎝、底径 6㎝、器高 4.3㎝を測る。住居址北西隅で出土した。P11 があるが、上層からの出土で、住居址覆土での出土と考えている。

2　土師器の坏で、口径 12㎝、底径 4.2㎝、器高 4.1㎝を測る。カマドの崩れた礫の下から出土しているが、底面からは 20㎝浮いている。

3　土師器坏で、口径 12.4㎝、底径 6.2㎝、器高 4㎝を測る。P1 から出土した。

4　土師器坏で、口径 12.4㎝、底径 6.2㎝、器高 3.9㎝を測る。P1 から出土した。

5　土師器坏で、底部のみの出土である。底径 6.2 センチを測る。カマドの袖石より高い位置で出土している。

6　土師器高台付坏で、口径 14㎝を測る。高台部分は欠損しているが、7 と同じような脚の長い高台が付くと思われる。住居址北東隅の床面直上で出土している。

7　内面黒色処理された土師器高台付坏で、口径 13.6㎝、底径 7.4㎝、器高 5.8㎝を測る。北壁際中央で出土しているが、床面からは 10㎝以上浮いた状態での出土である。

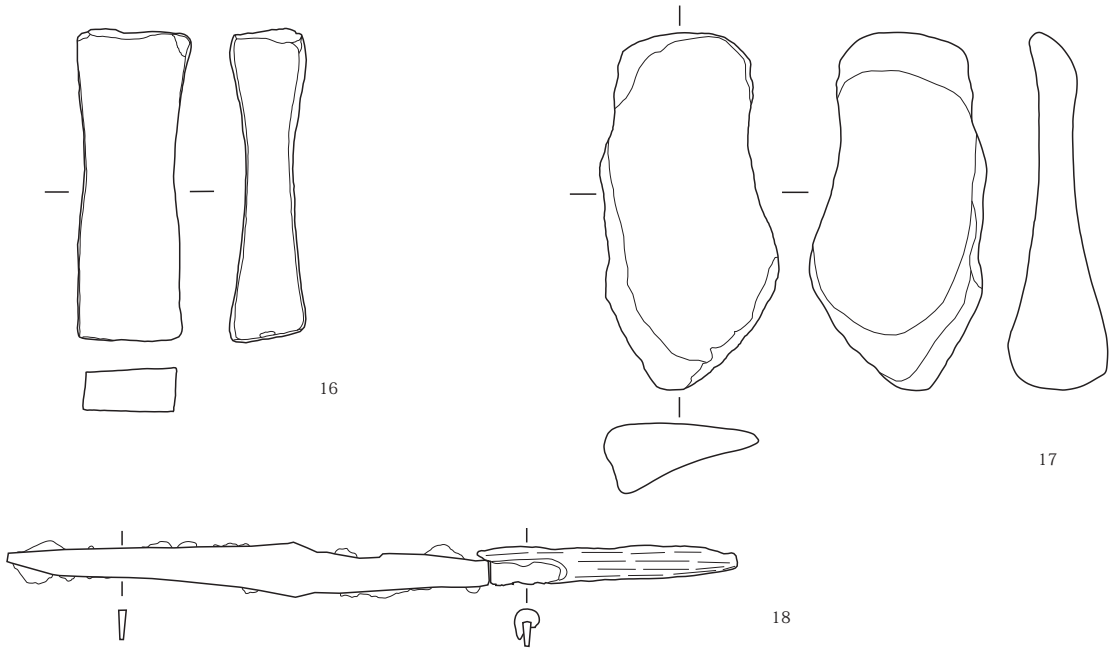
8　内面黒色処理された土師器高台付坏で、内面には放射状の暗文が施されている。口径 14㎝、底径 7.2㎝、器高 5.3㎝を測る。カマドの袖石より高い位置で出土している。

9　内面黒色処理された土師器坏で、底部は結束している。口径 12㎝を測る。

10　灰釉陶器の皿で、口径 13㎝、底径 5.4㎝、器高 4.1㎝を測る。表土剥ぎの際、最初の発見した遺物で、カマドの上に伏せるような形で出土した。

11　灰釉陶器の皿で、口径 13.2㎝、底径 6.7㎝、器高 4㎝を測る。口縁の 1/3 を欠く。住居址南西の床面直上から出土した。

12　灰釉陶器の皿で、口径 12.6㎝、底径 7.2㎝、器高 4.2㎝を測る。11 と並んで、住居址南西の床面直上から出

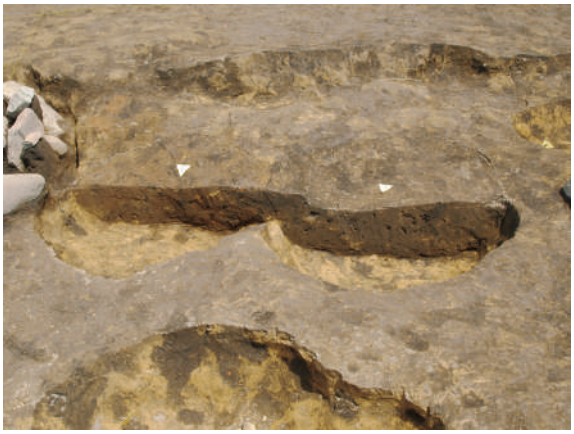


第 6 図　1 号住居址出土遺物 (2)（16・17 は 1/3、18 は 1/2)

土している。割れてはいたがほぼ完形となる。
13　灰釉陶器の埦で、口径 16.2㎝、底径 8㎝、器高 5.2㎝を測る。カマドの上面、10 に並んで出土している。
14　灰釉陶器の埦で、口径 16㎝、底径 7.4㎝、器高 5.8㎝を測る。欠損が大きく、復元実測である。住居址の南東隅から土師器坏と共に出土した。
15　土師器の甕で、1/2 ほどの遺存率である。歪みが大きい。口径 15.6㎝、底径 9.8㎝、器高 15㎝を測る。住居址北東隅から出土している。
16 は定型の砥石で、住居址中央やや西側の床面から出土した。長さ 12.5㎝を測る。4 面とも利用されている。
17 は自然石を用いた砥石で、長さ 14.5㎝を測る。P6 の覆土内から出土した。
18 は刀子で、住居址の東壁近くの床面から出土した。刀身の長さは 8㎝、茎の長さは 11㎝で、全長 19㎝を測る。刀身と茎の間に関がある。切先は直線的である。刃部は内反りとなっているが、使用減りまたは砥反りであろう。茎の尻部に木質の柄を残している。
　刀子はもう 1 点、住居址中央部の床面から出土している。長さ 6㎝で、両端が折れており、部位は刀身と茎の間のものである。図示はしていない。
19(図版 31-19) は銅製の金具の一部である。住居址の貼床下から出土した。目視では、6㎜ほどの厚さの銅板に径 12㎜の六角形のボルトを埋め、そのボルトを径 3㎜、長さ 24㎜のピンで留めてあるように見える。長野県立歴史館の協力によりＸ線写真の撮影を試みたが、個別の部材を判別することはできなかった。
20(図版 31-20) は鉄滓で、Ｐ３から出土した。径 8 ～ 9㎝、厚さ 4㎝、重さ 245 ｇを量る。

図版 21　1 号住居址 P1 遺物出土状態

図版 22　1 号住居址 P2 遺物出土状態


図版 23　1 号住居址 P5(左)・P7

図版 24　1 号住居址北東隅遺物出土状態

図版 25　1 号住居址南壁際遺物出土状態

図版 26　1 号住居址北壁際遺物出土状態

図版 27　1 号住居址東壁際遺物出土状態

図版 28　1 号住居址東壁際遺物出土状態

図版 29　1 号住居址砥石出土状態

図版 30　1 号住居址刀子出土状態

図版 31　1 号住居址出土遺物

2 号住居址 (第 7 図、図版 32)

西側は水田への造成前の小さな畑による段差があり、西壁の大部分と南壁の西側が消失している。平面形態は隅丸方形で、南北 3.6 m、東西 3.5 mを測る。壁高は最も高い北東隅で 40㎝を測る。

カマドは北壁の中央よりやや東に寄ったところにある。天井石、袖石は比較的良く残っている。支脚も柱状の礫を用いており、そこに土師器の坏を被せた状態で検出された (図版 36)。煙道は壁から 30㎝ほど張り出しているが、この部分に天井石は残っていない。

周溝は消失している西壁側を除いて確認できるが、浅いため東壁中央など、一部検出できない個所がる。

住居址の北東から中央に向かって 40 ～ 50㎝ほどもある礫が流れ込んでいるような状態で検出された。床面にも平たい礫がいくつかあるが、これには灰釉陶器片が乗っているなど廃棄時に近い状態を示していると思われる。

床面は、東側中央が焼けている。また、東側に集中して床下土坑が多く見つかっている。

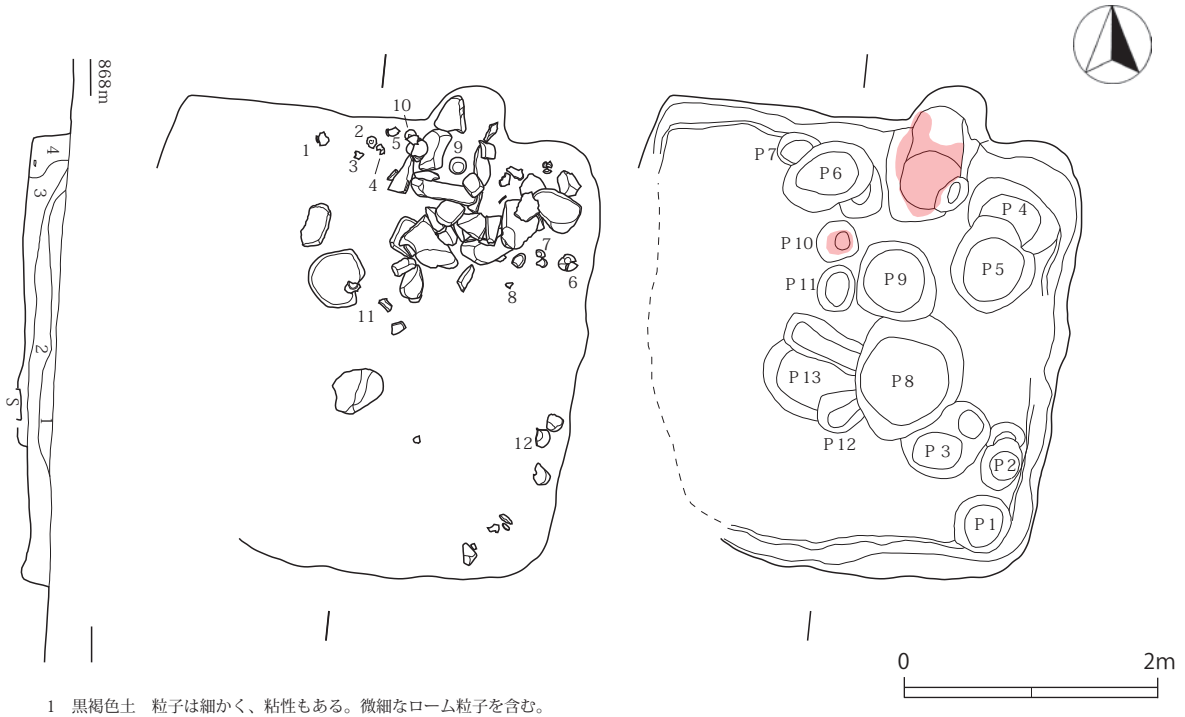
遺物は北壁のカマドの西側と、北東隅のやや南側で出土している。

P1　住居址南東隅にある。平面形態はほぼ円形を呈し、径 45 ～ 48㎝、深さ 17㎝を測る。覆土には、焼土、灰、ロームブロックなどが入る。貼床は認められなかった。

P2　住居址の南東隅、P1 のすぐ北にある。平面形態は長円形で、長径 43㎝、短径 33㎝、深さ 16㎝を測る。覆土に焼土や灰を少量含む他、拳大の礫、ロームブロックが入る。北側に深さ 13㎝ほどのピットが重複するが、番号は付していない。貼床は認められなかった。

P3　P2 の西にある。平面形態は長円形で、長径は 70㎝、短径は P8 と重複しているため明らかでないが 50㎝ほどになろう。底面に 3㎝ほどの段差があるので、2 基の円形のピットが重複している可能性もある。覆土にロームブロックの他、焼土や灰が混じるが、上層の方が多い。貼床が認められたが、北側の床面より一段低くなっている。

P4　住居址の北東隅にある。住居内に入り込んでいる礫を取り除いたところで検出された。南側で P5 と重複しているが、覆土がほとんど同じであるが、平面での確認において P5 のほうが新しいように見受けられた。径 75㎝、



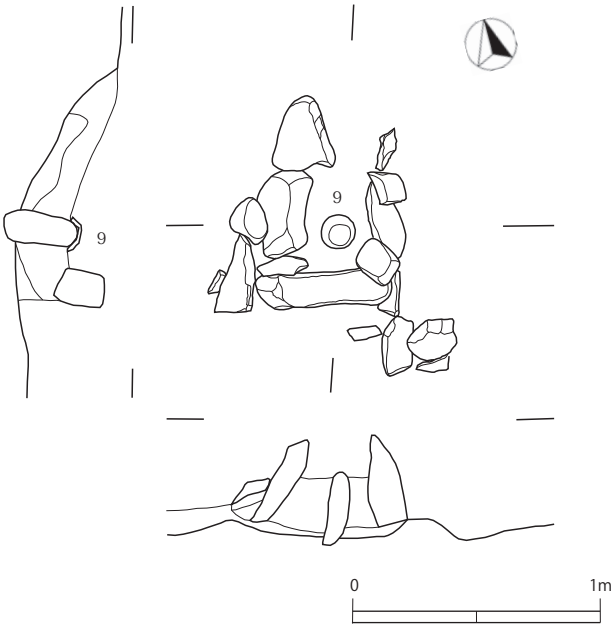
1　黒褐色土　粒子は細かく、粘性もある。微細なローム粒子を含む。
2　暗褐色土　粒子は細かく、粘性は 1 よりも強い。微細なローム粒子のほか、5㎜大のロームブロックを含む。
3　黒褐色土　粒子は細かく、粘性は強い。微細なローム粒子を少量含む。焼土粒子・炭化物を含む。
4　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含む。カマドの袖の一部か。粘性あり。

第 7 図　2 号住居址 (1/60)

深さ 15㎝を測る。覆土は焼土・炭・粘土が多く混じる。また、2 ～ 3㎝の礫、ロームブロックも少量入る。

P5　住居址の北東隅にあり、P4 と重複する。平面形態は円形で、規模は径 65 ～ 75、深さは 22㎝である。覆土は P4 と同じである。

P6　住居址北壁際中央、カマドの西側にある。平面形態は長円形で、長径 75㎝、短径 50㎝を測る。深さは25㎝ある。住居址の床面レベルで土師器の坏 (第 9 図 2 ～ 5、図版 40) が出土しているが、直接本址に関わるものではなさそうである。覆土は焼土や炭化物、灰が多量に入る。また、焼土塊やロームブロック、灰なども混じる。鉄滓が出土している。東側に深さ 20㎝のピットが重複しているが、番号は付していない。



第 8 図　2 号住居址カマド (1/40)

P7　住居址北壁際中央、P6 の西側にあり重複している。床レベルでは、P6 を切っているように見られた。平面形態は円形に近いと思われる。規模は径 30㎝、深さ 8㎝である。覆土は暗褐色土で、焼土や炭化物、灰などは入らない。

P8　住居址の中央やや東寄りにある。平面形態は長円形で、長径 105㎝、短径 85㎝を測る。断面形態はタライ状で、

図版 32　2 号住居址 (南から)

図版 33　2 号住居址土層断面 (西から)

図版 34　2 号住居址カマド

図版 35　2 号住居址カマド脇出土の遺物

図版 36　2 号住居址カマド支脚に被せられた土師器坏

図版 37　2 号住居址 P8 土層断面

深さは 35㎝ある。南西側に床面に大きな礫を乗せた P12 があり、この礫が P8 にかかっていることから P12 が新しいと考えられる。また、北側に P9 があるが、こちらとの新旧関係は不明である。貼床は認められなかった。覆土の上層は黒色土。下層は焼土や炭化物の混入が多い。ロームブロックも入る。

P9　カマドの前面にあり、南側で P8 と重複する。平面形態はほぼ円形で、径 60㎝を測る。断面形態は皿状で、深さ 14㎝を測る。覆土には多量の焼土が入る他、炭化物やロームブロックも入る。

P10　平面形態はほぼ円形で、径 35㎝、深さは 11㎝を測る。壁面と坑底の一部が焦げたように黒色化しているほか、一部焼土化している。覆土は黒色土で、炭化物が多く含まれる。坑底に鉄滓、焼土、灰が認められた。

P11　P10 の南にある。南北に長い平面形態は長円形で、長径 38㎝、短径 30㎝を測る。深さは 10㎝ほどである。覆土は黒色土で、ローム粒子の混入がある。

P12　住居址床面にある径 25㎝ほどの礫を取り除いたところ、検出された。東西に長い長円形となるが、東で P8 と重複しているため長径は不明である。短径は 35㎝を測る。深さは 12㎝ほどである。覆土は黒色土で、ローム粒子が混じる。

P13　東側で P8 と P12 と重複する。また、北側に深さ 20 ～ 30㎝の溝状の掘り込みと重複している。深さは 15㎝ほどである。床面に床に食い込むように平たい自然礫がある。

覆土にはロームブロックが多量に入るほか、焼土も混じる。回収できた量は少ないが、微細な金肌が出土している。

出土遺物 (第 9 図、図版 40)

出土遺物には、土師器坏と灰釉陶器埦がある。

1　土師器の坏で、口径 11.2㎝、底径 6㎝、器高 3.5㎝を測る。住居址北壁際中央よりやや西側で出土した。同位置に P6 があるが、床面レベルからの出土で、住居址覆土での出土と考えている。

2　土師器の坏で、口径 12㎝、底径 6.2㎝、器高 4.5㎝を測る。住居址北壁際中央で出土した。同位置に P6 があるが、床面レベルからの出土で、住居址覆土での出土と考えている。

3　土師器の坏で、口径 13㎝、底径 6.4㎝、器高 5㎝を測る。住居址北壁際中央で出土した。同位置に P6 があるが、床面レベルから 3㎝ほど浮いた状態で出土しており、住居址覆土での出土と考えている。

4　土師器の坏で、口径 12㎝、底径 6.6㎝、器高 4.3㎝を測る。住居址北壁際中央で出土した。同位置に P6 があるが、床面レベルから 11㎝ほど浮いた状態で出土しており、住居址覆土での出土と考えている。

5　土師器の坏で、口径 12.4㎝、底径 6.6㎝、器高 4.3㎝を測る。住居址北壁際中央で出土した。床面レベルから 15㎝ほど浮いた状態で出土しており、住居址覆土での出土と考えている。

6　土師器の坏で、口径 11.8㎝、底径 5.4㎝、器高 4㎝を測る。住居址等壁際の北寄り、床面からやや浮いたところから出土した。

7　土師器の坏で、口径 11.2㎝、底径 6㎝、器高 3.5㎝を測る。住居址等壁際の北寄り、床面からやや浮いたところから出土した。

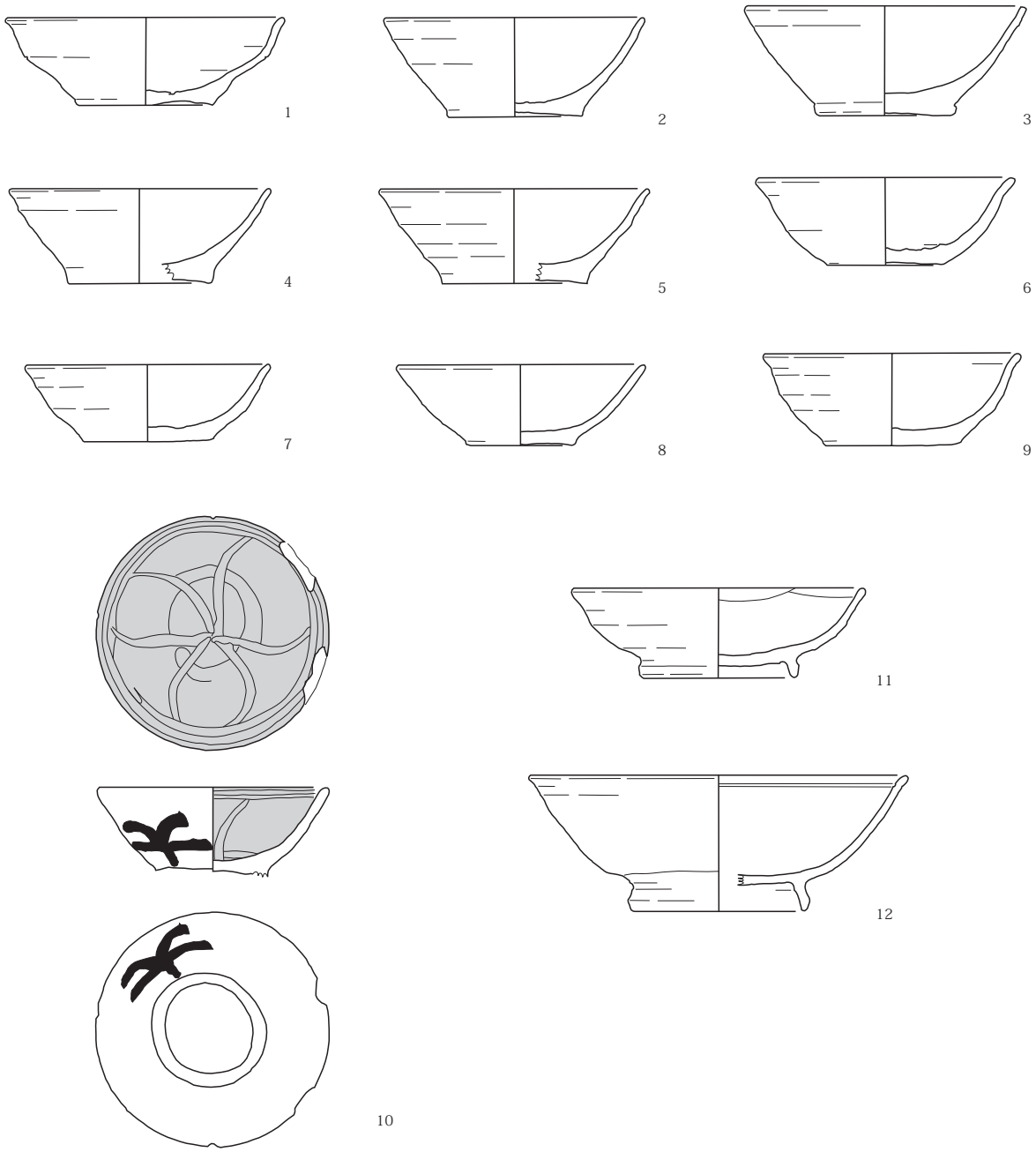
8　土師器の坏で、口径 11.4㎝、底径 5㎝、器高 3.7㎝を測る。住居址等壁際の北寄り、床面からやや浮いたところから出土した。

9　土師器の坏で、口径 11.8㎝、底径 6.2㎝、器高 4.2㎝を測る。カマドの石柱状の支脚の上に被せる形で出土した。ほぼ完形での出土である。

10　北壁際カマドの脇から出土しているが、床面からは 15㎝ほど浮いている。内面を黒色処理した土師器高台付の坏であるが、高台部分は欠損している。内面に暗文がみられる。外面には「大」字が墨書されている。口径 10.6㎝、坏部底径 5.2㎝、坏部器高 4㎝を測る。

11　灰釉陶器の埦で、口径 13.4㎝、底径 7㎝、器高 4.1㎝を測る。住居址中央、やや北寄りの床面におかれた平たい礫の上から出土した。

12　灰釉陶器の埦で、口径 13.4㎝、底径 7㎝、器高 4.1㎝を測る。東壁際中央よりやや南側で出土した。



第９図　２号住居址出土遺物 (1/3)

3 号住居址 (第 10 図、図版 38)

表土剥ぎを行った際、黒色土の掘り込みが認められた。北東隅でカマドの焼土が検出されたほか、遺物の出土もあって、住居址と確認した。すでに床面の出ている個所もあり、覆土のほとんどは削平され、消失してしまっている。覆土に焼土粒子を多く含んでいるほか、床面から炭化材が出土していることから焼失住居であると考えられる。

平面形態は北辺がやや長い隅丸方形で、南北 3.2 m、東西 2.9 mを測る。壁高は最も高い北東隅でも 9㎝ほどしかない。

カマドは北東の隅にある。残りが悪く、天井石、袖石は認められず、僅かに火床面が残るのみである。北東隅に礫が集中して見られたが、焼けた痕跡はなく、カマドを構築したものではなさそうである。

周溝は認められない。

住居址の東側にいくつかの床下ピットがあるが、どれも深さが 10㎝もない。北西隅のピットはカマドの袖石を抜き取ったものかもしれない。東壁に掛るピットは、周辺にもピットがみられることから、本遺構に属するものではないであろう。

出土遺物 (第 11 図、図版 40)

出土遺物には、土師器の皿と坏がある。遺物は北壁のカマドの周辺で出土している。

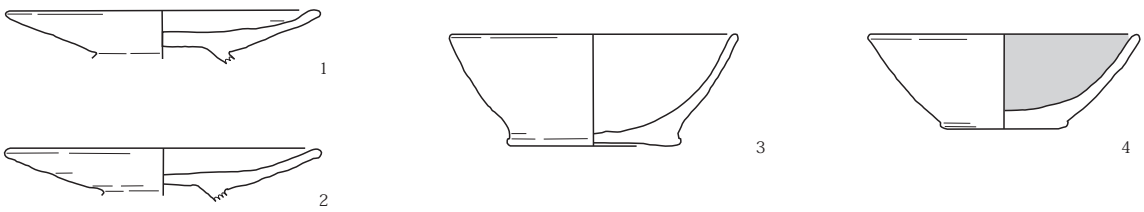
1　土師器の高台付皿であるが、高台部分を欠損している。東壁北寄りのカマド近くで、2 と重なるようにして出土した。口径 12.8㎝を測る。

2　土師器の高台付皿であるが、高台部分を欠損している。口径 12.8㎝を測る。

3　土師器の坏で、口径 11.6㎝、底径 7 ㎝、器高 4.5㎝を測る。1・2 と同じく、東壁北寄りのカマド近くで出土した。

4　内面黒色処理をした土師器の坏で、口径 11㎝、底径 5㎝、器高 3.8㎝を測る。カマド前面の焼土の中から出土した。

第 10 図　3 号住居址 (1/60)



第 11 図　3 号住居址出土遺物 (1/3)

図版 38　3 号住居址 (南から)

図版 39　3 号住居址遺物出土状態

図版 40　2・3 号住居址出土遺物

第 2 節　土坑

土坑は 1 号土坑から 34 号までの 34 基を検出した。1 号土坑と 2 号土坑は、平成 28 年度に実施した試掘調査で検出したものである。他にピットが多数あり、大きさや形状が柱穴状のものをピットとしたが、上面が削平されて浅いものもあるため、明確な基準により区別したものではない。

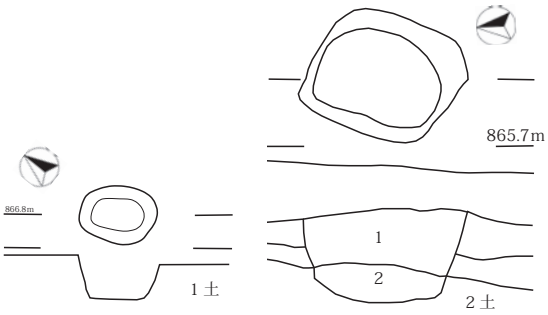
試掘 1 号土坑 (第 12 図)

H4c3 のほぼ中央に位置する。平成 29 年度に実施した試掘調査で検出した。平面形態は長円形で、長径 40㎝、短径 30㎝を測る。断面形態はバケツ状で、深さ 23㎝を測る。

覆土は暗褐色土で粘性は弱い。ロームブロック・ローム粒子を含む。

試掘 2 号土坑 (第 12 図)

H6D4 の北西隅に位置する。平成 29 年度に実施した試掘調査で検出した。試掘調査ではトレンチの端にかかった部分の掘り下げを行っただけで半円状のプランであったが、完掘の結果、平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈しており、規模は長径 75㎝、短径 65㎝を測る。断面形はバケツ状で、深さはトレンチの断面によれば 50㎝ある。



第 12 図　1・2 号土坑 (1/40)

覆土は 2 層に分層でき、どちらも黒色土で下層の方が締まっている。

3 号土坑 (第 13 図、図版 41)

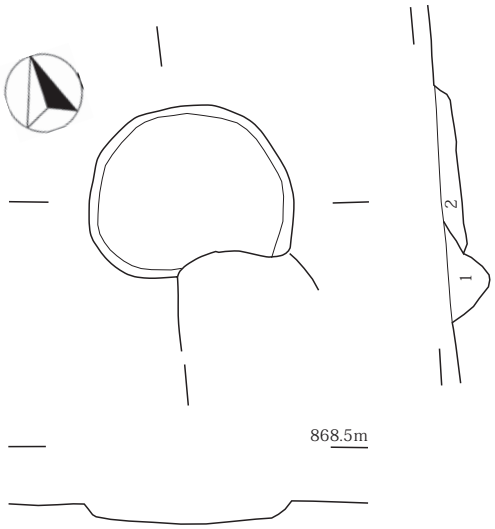
B4e4 に位置する。平面形態は長円形で、規模は長径 110㎝、短径 90㎝を測る。残存する深さは僅か 10㎝ほどであるが、周辺の削平されている状況を見れば、数 10㎝はあったと考えられる。

覆土は黒褐色土で、1㎜以下のローム粒子が少量入る。南側に暗褐色土の入る穴があるが、これは開田の際に礫を抜き取った痕跡と考えられ、これよりも古いことは確実であるが、時期は不明である。

4 号土坑 (第 14 図、図版 42)

D3b2 に位置する。平面形態は長方形で、規模は長径 85㎝、短径 60㎝を測る。深さは 50㎝で、南壁と西壁にロームに入る礫が露出しており、これを壁面にしているが、人為的な土坑であることは明らかである。

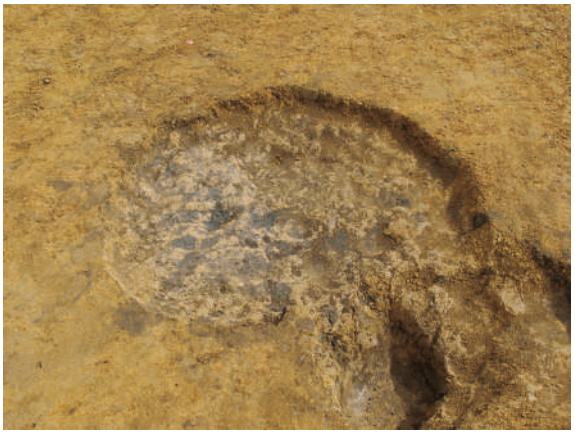
覆土は暗褐色土の単一層で、3 ～ 5㎝大のロームブロックが入る。

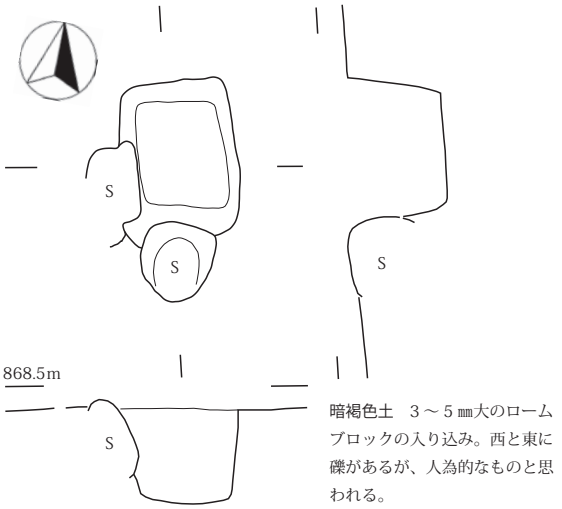


1　暗褐色土　1 ～ 2 ㎝大のロームうロックの入り込み。礫を抜き取った痕跡と考えられる。

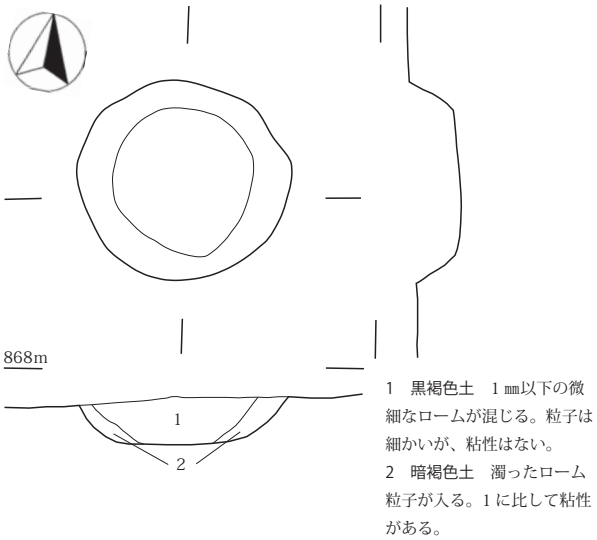
2　黒褐色土　1 ㎜以下のローム粒子が少量入る。

第 13 図　3 号土坑 (1/40)


図版 41　3 号土坑 (南から)

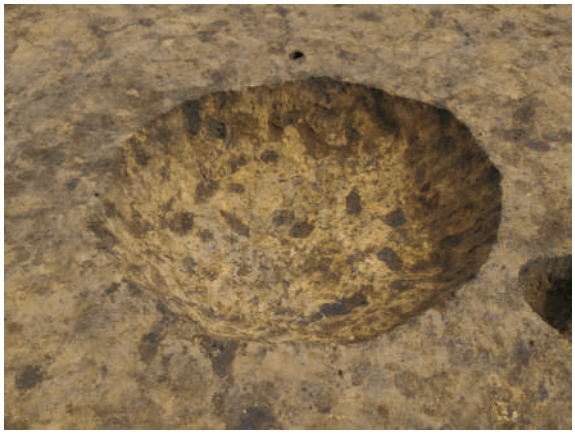


第 14 図　4 号土坑 (1/40)



第 15 図　5 号土坑 (1/40)

図版 42　4 号土坑 (南から)



図版 43　5 号土坑 (南から)

5 号土坑 (第 15 図、図版 43)

C6d5 に位置する。平面形態は円形で、規模は径 110㎝を測る。断面形は皿状で、深さは 25㎝である。

覆土は黒褐色土で、粒子は細かいが粘性はない。1㎜以下の微細なロームが稀に入る。壁際は暗褐色土で、濁ったローム粒子が稀に入る。

6 ～ 8 号土坑 (第 16 図、図版 44)

E5d2 に位置する。掘り下げ時は 1 基の長円形の土坑として掘り下げていったが、3 基の土坑が重複していた。6 号土坑は 7・8 号土坑と重複している。平面の形状はいびつであるが、径 60㎝の柱穴状の掘り込みである。深さは 32㎝あるが、底面は小さく径 25㎝である。

覆土は黄褐色土の単一層で、粒子は細かく、ボソボソしている。2㎝大のロームブロック・ローム粒子を含む。

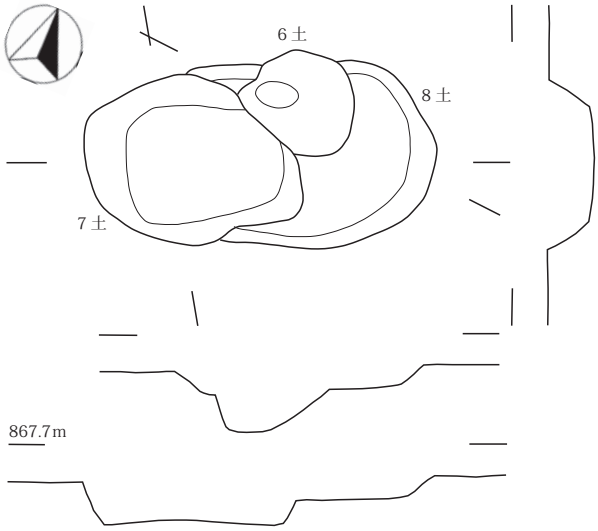
7 号土坑は重複している穴の西側にある。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径 115㎝、短径 90㎝を測る。深さは 20㎝である。

覆土は黄褐色土の単一層で、粒子は細かく、ボソボソしている。2㎝大のロームブロック・ローム粒子を含む。

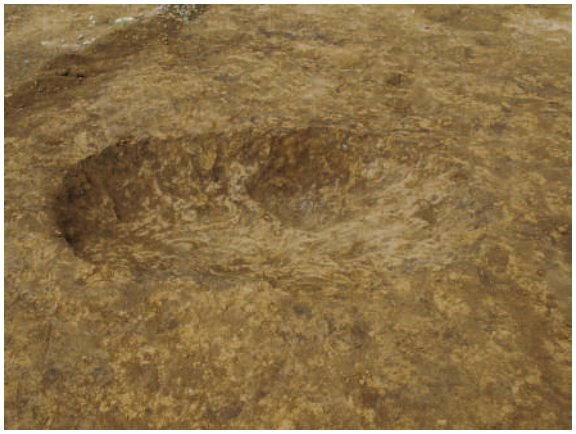
8 号土坑は掘り込みの東側にある。平面形態は長円形であろう。西側が 7 号土坑と重複し、長径は不明であるが、140㎝ほどはあったであろう。短径は 100㎝、深さは 15㎝である。

9 号土坑 (第 17 図、図版 45)

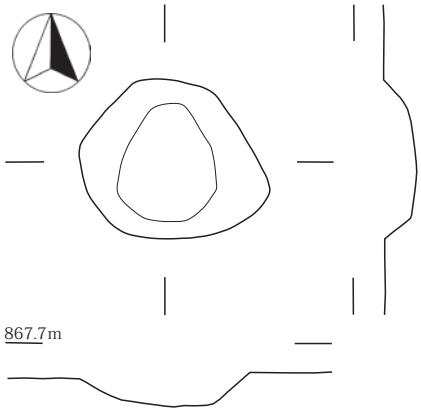
E6a2・3 に位置する。平形態は隅丸の三角形状を呈している。最大径は 105㎝を測る。断面は皿状であるが、



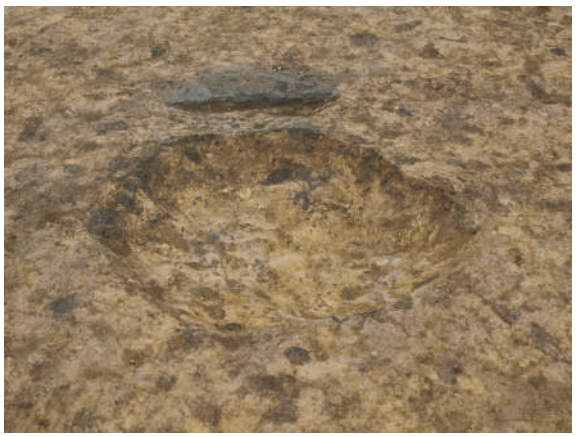
第 16 図　6・7・8 号土坑 (1/40)



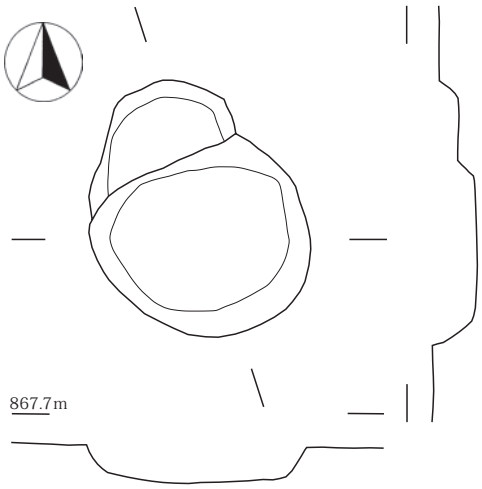
図版 44　6・7・8 号土坑 (南から)



第 17 図　9 号土坑 (1/40)



図版 45　9 号土坑 (南から)



第 18 図　10 号土坑

図版 46　10 号土坑 (南から)

東側がやや深く 15㎝ほどである。
覆土は暗褐色土の単一層で、粒子は細かいが粘性に乏しい。ローム漸移層と黒色土が混じっている。

10 号土坑 (第 18 図、図版 46)

E5c1 に位置する。平面形態はほぼ円形で、規模は径 115㎝、深さ 25㎝を測る。北側で深さ 10㎝ほどの土坑と重複しているが、土坑番号は付していない。

11 号土坑 (第 19 図、図版 47)

D6d3･4 に位置する。平面形態はほぼ円形で、規模は径 60 ～ 75㎝を測る。深さは最も深いところで 15㎝である。

覆土は暗褐色土の単一層で、粒子は細かいが粘性に乏しい。ローム漸移層と黒色土が混じっている。

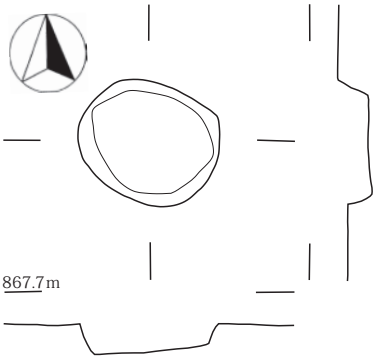
12 号土坑 (第 34 図、図版 61)

F8e4・G8a3 に位置する。17 号土坑、さらに 1 号竪穴と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 105㎝、短径は推計で 34㎝ほどである。深さは最も高いローム面から 45㎝ほどである。

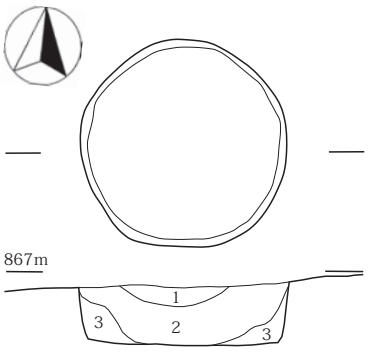
13 号土坑 (第 21 図、図版 48)

E8b1 に位置する。平面形態はほぼ円形で、規模は径 110㎝を測る。断面形はタライ状で、深さ 32㎝を測る。

覆土は 3 層に分層できる。1 層は黄褐色土で、1㎝以下のロームブロック、微細なローム粒子を含む。2 層は黒色土で、5㎜以下のロームブロックを少量含む。3 層は暗褐色土で、5㎜以下のロームブロックを含む。

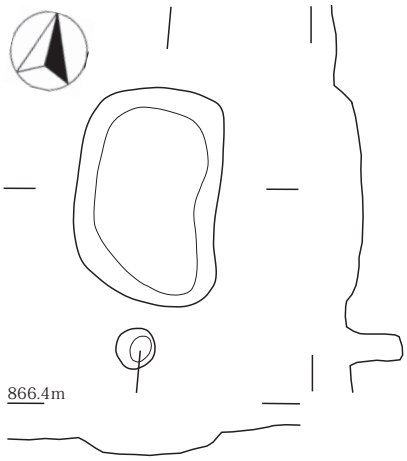


第 19 図　11 号土坑 (1/40)



1　黄褐色土　ローム粒子、1 ㎝以下のロームブロックを含む。
2　黒色土　5 ㎜以下のロームブロックを少量含む。
3　暗褐色土　5 ㎜以下のロームブロックを含む。

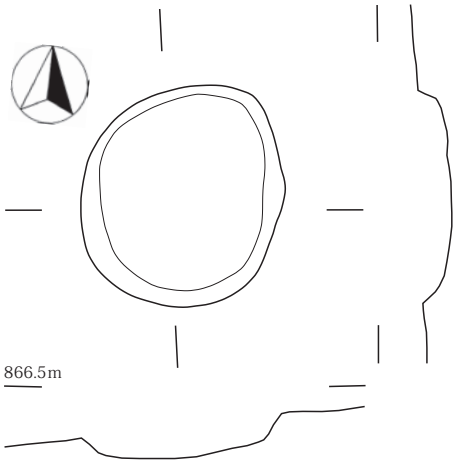
第 20 図　13 号土坑 (1/40)



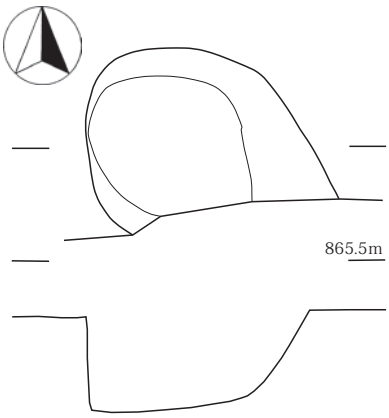
第 21 図　14 号土坑 (1/40)

図版 47　11 号土坑 (南から)

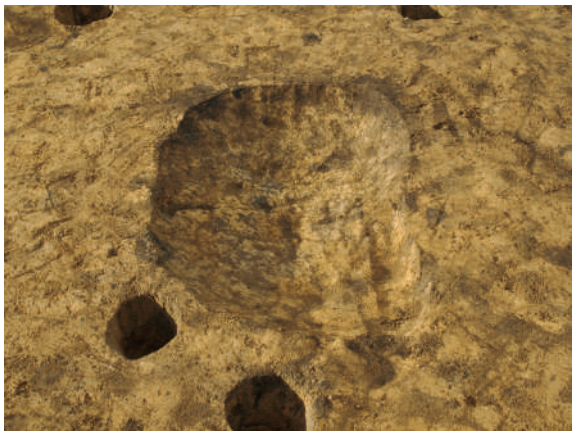
図版 48　13 号土坑 (南から)



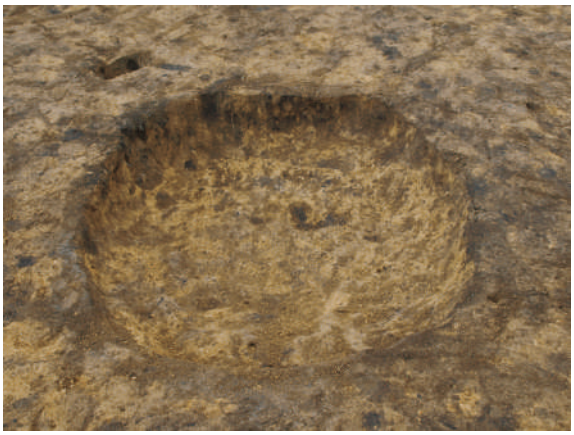
第 22 図　15 号土坑 (1/40)



第 23 図　18 号土坑 (1/40)



図版 49　14 号土坑 (南から)



図版 50　15 号土坑 (南から)

14 号土坑 (第 21 図、図版 49)

F8c4・5 に位置する。平面形態は隅丸長方形で、南東隅がやや膨らむ。規模は長径 115㎝、短径 75cm を測る。断面形は皿状で、深さ 10㎝ほどと浅い。

覆土は黒褐色土の単一層で、粒子は細かいが粘性に乏しい。1㎝大のロームブロックを少量含む。

15 号土坑 (第 22 図、図版 50)

F9b1 に位置する。平面形は長円形で、規模は長径 120㎝、短径 105㎝を測る。断面形は皿状で、深さは 15㎝を測る。

覆土は黒褐色土の単一層で、粒子は細かいが粘性に乏しい。1㎝大のロームブロックを少量含む。

16 号土坑 (第 34 図、図版 61)

G8a4 に位置する。平面形態は径 65㎝のほぼ円形を呈し、深さは 15㎝である。

17 号土坑 (第 34 図、図版 61)

F8e4・G8a3 に位置する。12 号土坑・22 号土坑、さらに 1 号竪穴と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 150㎝、短径は推計で 100㎝ほどである。深さは最も高いローム面から 33㎝ほどである。

18 号土坑 (第 23 図)

調査区南壁際で検出された。調査区の端にかかっており、平面形態は不明であるが、隅丸長方形を呈するものか。規模は短径 110㎝を測る。断面形はタライ状で深さ 50㎝ある。調査区の南を流れる堰よりも低いため、覆土に水分が多量に含まれている。遺物は、縄文土器片が 1 点出土している。

19 号土坑 (第 24 図、図版 51)

J7c4 に位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は長径 140㎝、短径 103㎝を測る。断面形はタライ状を呈していたと考えられるが、上面を削平され、現状の深さは 20㎝である。

覆土は暗褐色土で､粒子は細かく粘性もある。上層は黒色土が多いが､分層は難しい。ローム粒子の混入が多い。

20・21 号土坑 (第 25 図、図版 52)

J7d3・4、J7e3・4 に位置する。平面形態は東西に長い長方形を呈すると考えられる。西側で 21 号土坑と重複しており、長径は不明であるが、200㎝ほどはあったであろう。短径は 100㎝ある。上面を削平されていると考えられ、現状の深さは 10㎝以下である。平面での覆土の観察により 21 号土坑と重複し、21 号土坑が新しい。

覆土は暗褐色土で、粒子は細かく粘性もある。ローム粒子の混入が多い。

21 号土坑の平面形態は方形を呈し、径 120㎝を測る。断面形はタライ状を呈していたと考えられるが、上面を削平され、現状では 25㎝ほどしか残っていない。20 号土坑と重複し、21 号土坑が新しい。

覆土は黒褐色土で、粒子は細かく粘性もある。5㎜～ 1㎝のロームブロックが混入する。

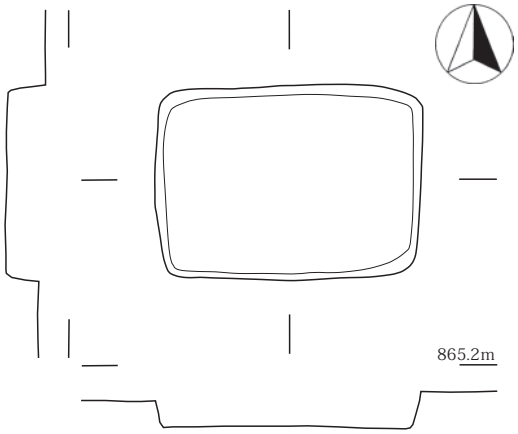
22 号土坑 (第 34 図、図版 61)

F8e4・G8a3 に位置する。17 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 100㎝、短径 60㎝を測る。遺構の深さは、最も深い北側で 40㎝である。

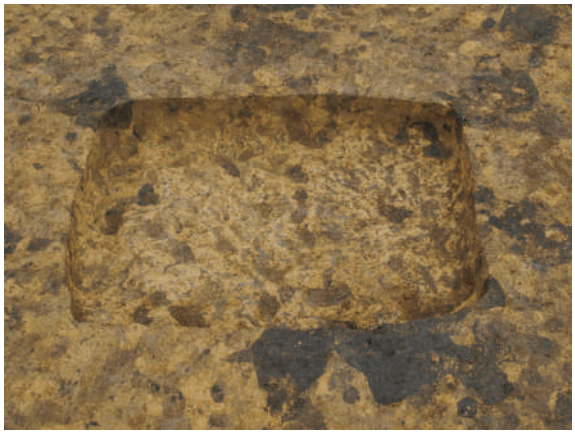
覆土は黒褐色土で、粒子は細かく粘性もある。下層に 5㎜以下のロームブロックが混入する。

23 号土坑 (第 26 図、図版 53)

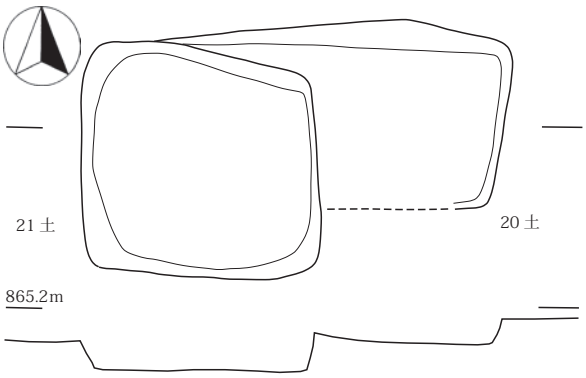
K7e1・2 に位置する。平面形態は長円形で、規模は長径 85㎝、短径 70㎝を測る。断面形は皿状で、深さは最も深いところで 13㎝である。底面の一部に住居址の床面のような硬い個所がある。



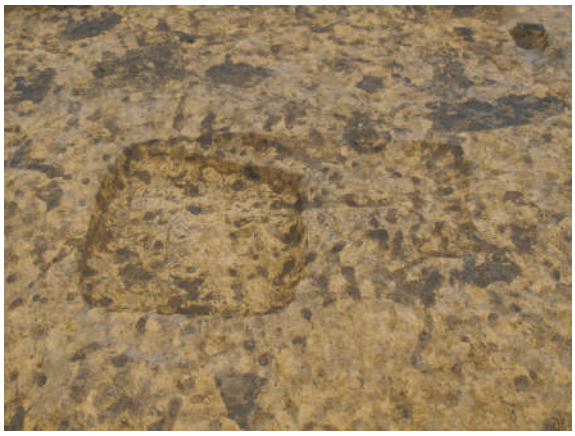
第 24 図　19 号土坑 (南から)



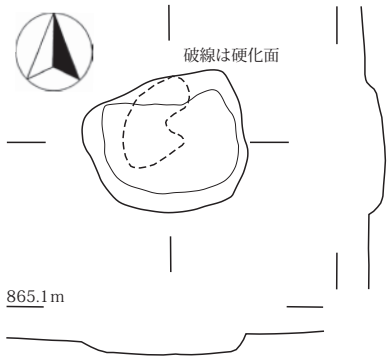
図版 51　19 号土坑 (南から)



第 25 図　20・21 号土坑 (1/40)

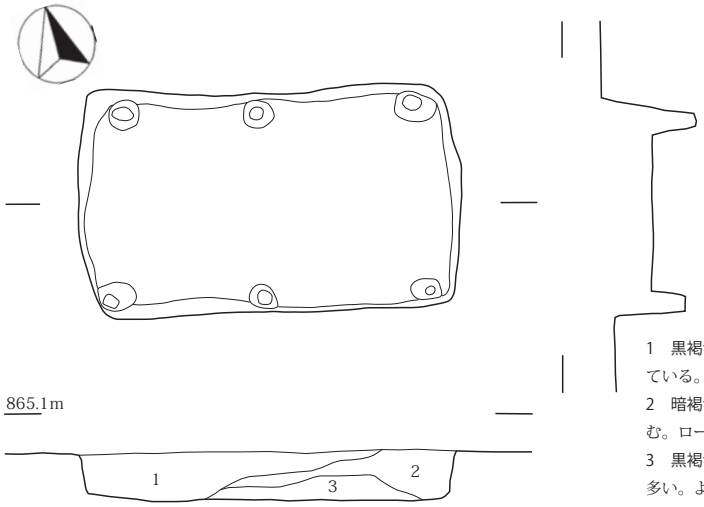


図版 52　20・21 号土坑 (南から)



第 26 図　23 号土坑 (1/40)

図版 53　23 号土坑 (西から)



1　黒褐色土　粒子は細かいが、よく締まっている。1 ㎝大のロームブロックを含む。
2　暗褐色土　2 ㎝大のロームブロックを含む。ローム粒子の混入多い。
3　黒褐色土　1 ㎜以下のローム粒子の混入多い。よく締まっている。

第 27 図　24 号土坑 (1/40)

覆土は暗褐色土で、粒子は細かく粘性もある。2 ～ 5㎜のロームブロックが混入するが、量は少ない。

24 号土坑 (第 27 図、図版 54)

L7b1・2、L7c1・2 に位置する。平面形態は東西に長い長方形を呈し、規模は長径 200㎝、短径 115㎝を測る。断面形は壁がほぼ垂直に立ちあがるタライ状を呈し、深さは 25㎝ほどである。底面の四隅と長辺壁際中央に径 20㎝、深さ 16 ～ 23㎝のピットが計 6 個ある。

覆土は 3 層に分層できる。1 層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締まっている。1㎝大のロームブロックを含む。2 層は暗褐色土で、2㎝大のロームブロックを含む他、ローム粒子の混入が多い。3 層は黒褐色土で、よく締まっている。1㎜以下のローム粒子の混入が多い。

25 号土坑 (第 28 図、図版 55)

L7b・c3 に位置する。平面形態は南北に長い長方形で、規模は長径 165㎝、短径 90㎝を測る。南側半分の壁がほとんど削平されているが、水平な床面が確認された範囲を本遺構の規模とした。

覆土は黒色土で、5㎝ほどの暗褐色土が斑状に入る。

図版 54　24 号土坑 (西から)

26 号土坑 (第 29 図、図版 56)

K7c･d5 に位置する。平面形態は南西隅がくびれているが、もともとは東西に長い長方形であったと考えられる。規模は長径 175㎝、短径 90㎝を測る。深さは、現状では 5㎝ほどであるが、上部が削平されているのであろう。

覆土は黒褐色土で、粒子は細かく粘性もある。5㎜～ 1㎝のロームブロックが入る。

27 号土坑 (第 30 図、図版 57)

M7a2 に位置する。北側を耕作により削平されているため、平面形態は明らかでないが、一辺が 250㎝ほどの方形、あるいは長方形になると考えられる。深さは現状で 13㎝ほどであるが、かつてはもっと深かったであろう。

覆土は暗褐色土で、粒子は細かく粘性もある。1 ～ 2㎝のロームブロックが混じる。遺物として、黒曜石片と近世陶器片が 2 点出土した。

28 号土坑 (第 31 図、図版 58)

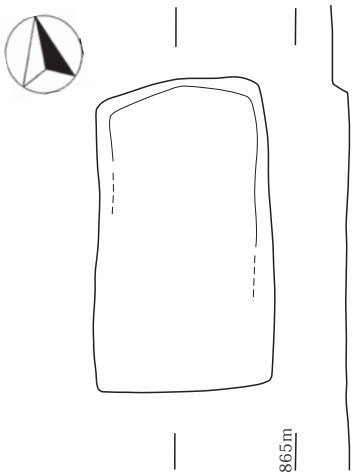
K4a1 に位置する。南北に長い不整長円形で、長径 180㎝、短径 135㎝を測る。遺構検出時はプランがしっかりしていたが、壁面は軟弱ではっきりしない。

覆土は 5 層に分かれ、下層に 20㎝ほどのロームブロックが多くみられる。

29 号土坑 (第 32 図、図版 59)

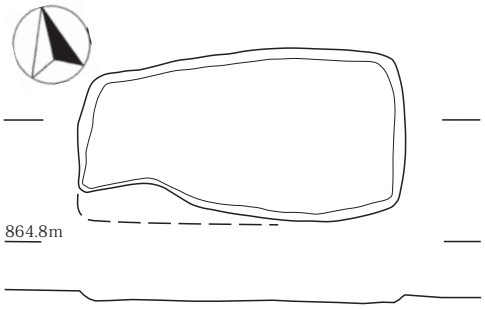
J3c2 の南西に位置する。平面形態はほぼ円形で、径は 70 ～ 75㎝である。断面形は皿状で、深さは 25㎝を測る。

覆土は暗褐色～黒褐色で、粒子は細かく良く締まっており、粘性もある。ローム粒子・ロームブロック等は含まない。最大 15㎝ほどの礫が下層に 8 点ある。

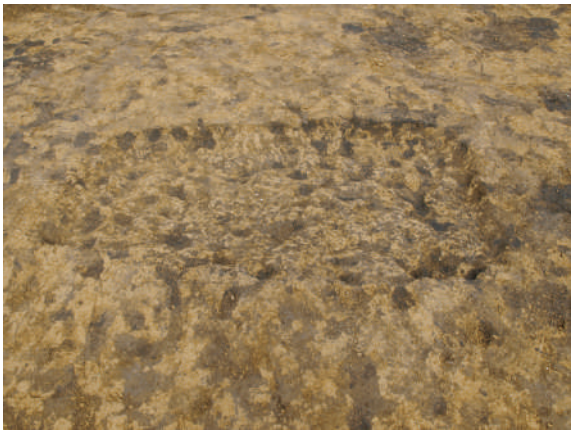


第 28 図　25 号土坑 (西から)

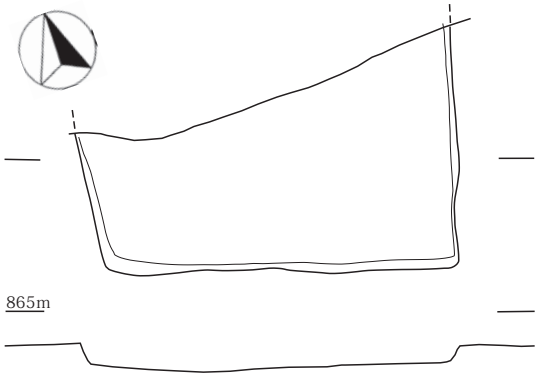
図版 55　25 号土坑 (南から)



第 29 図　26 号土坑 (1/40)



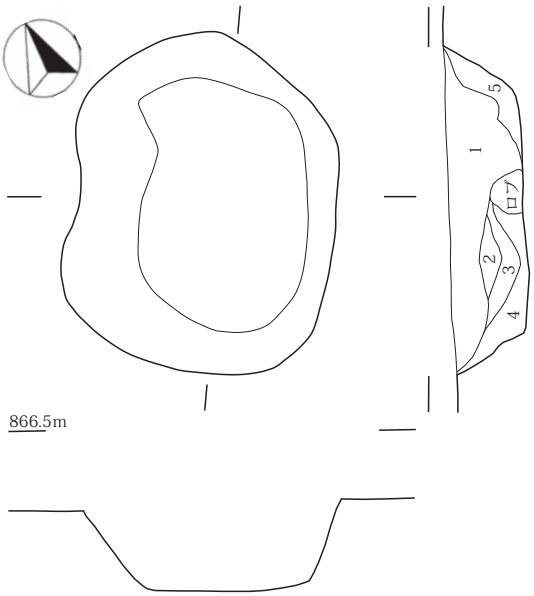
図版 56　26 号土坑 (南から)



第 30 図　27 号土坑 (1/40)

図版 57　27 号土坑 (北から)

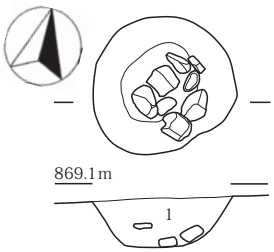
図版 58　28 号土坑 (北西から)



1　黒褐色土　粒子は細かいが粘性はある。よく締まっている。1 ㎝以下のロームブロックが稀に入る。
2　暗褐色土　粒子は細かく、よく締まっている。5 ～ 10 ㎜のロームブロックを多量に含む。
3　暗褐色土　粒子は細かく、よく締まっている。粘性があり、2 ㎝ほどのロームブロックを少量含む。
4　暗褐色土　粒子は細かく、よく締まっている。ローム粒子の混入が多い。粘性もある。
5　黄褐色土　硬く良く締まっている。下層ほどロームブロックの混入が多い。

第 31 図　28 号土坑 (1/40)

図版 59　29 号土坑 (北西から)



1　暗褐色～黒褐色土　粒子は細かく、よく締まっている。粘性もある。ローム粒子・ロームブロックなどは含まない。

第 32 図　29 号土坑 (1/40)

30 号土坑 (図版 61)

G9b2 の南西隅に位置する。平面形態は径 80 センチのほぼ円形を呈する。断面形は皿状で、深さは 10㎝ほどである。

31 号土坑 (第 33 図)

I7e5 と I8e1 にまたがる位置にある。平面形態は隅丸の三角形状を呈し、断面形態は深さ 10㎝ほどの皿状を呈する。南側で浅いピットと重複するが、新旧関係は不明である。

32 号土坑 (第 34 図、図版 60)

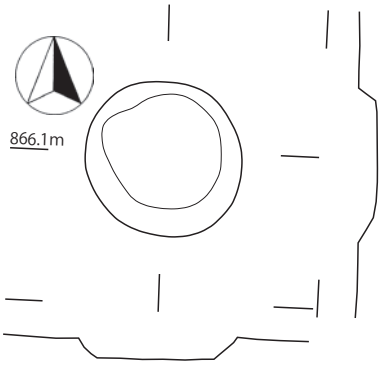
K8b2・3、K8c2・3 に位置する。当初 1 号竪穴と同じ大きな遺構になると考えていたが、掘り下げた結果、32 号土坑と重複する別々の遺構となった。

平面形態は、重複する 33 号土坑との土層断面図から長径が 340㎝、短径が 160㎝の南北に長い長方形を呈する。本遺構の方が新しい。底面形も長方形になるが、残された床面は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土の単一層で、粒子は細かく、よく締まっている。1 ～ 3㎝大のロームブロックが入る。

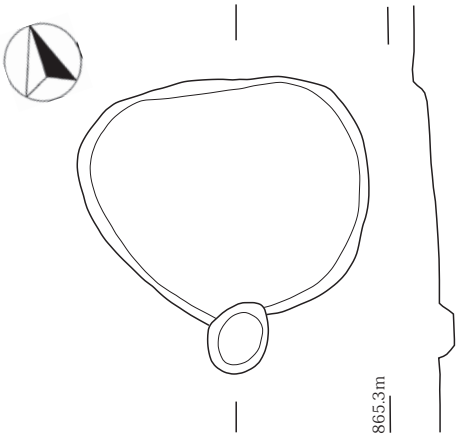
33 号土坑 (第 34 図、図版 60)

K8b・c1 に位置する。平面形態は台形状で、長径が 400㎝、短径は北辺で 230㎝、南辺が 110㎝である。土層観察により 32 号土坑が新しく、本遺構の方が古い。床面は凹凸が激しい。

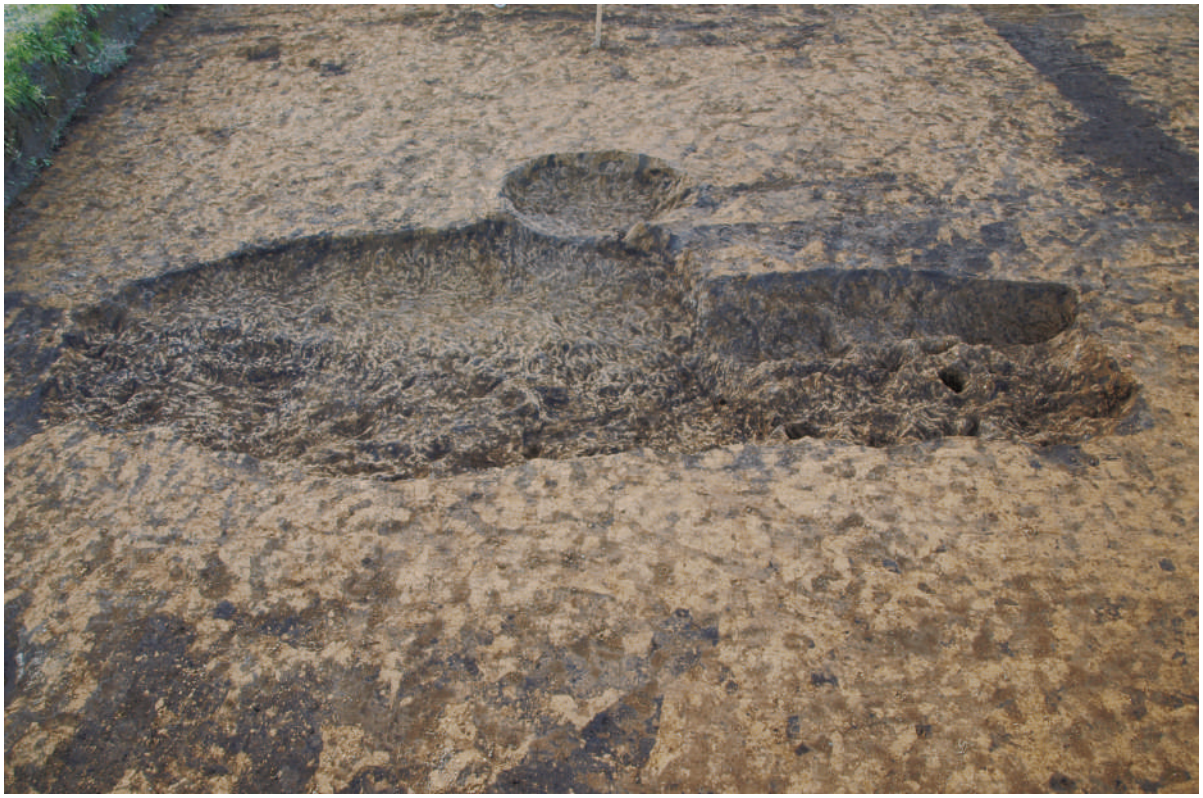
覆土は黒褐色土の単一層で、粒子は細かく、よく締まっている。5㎜以下のロームブロックを少量含む。



第 32 図　30 号土坑 (1/40)



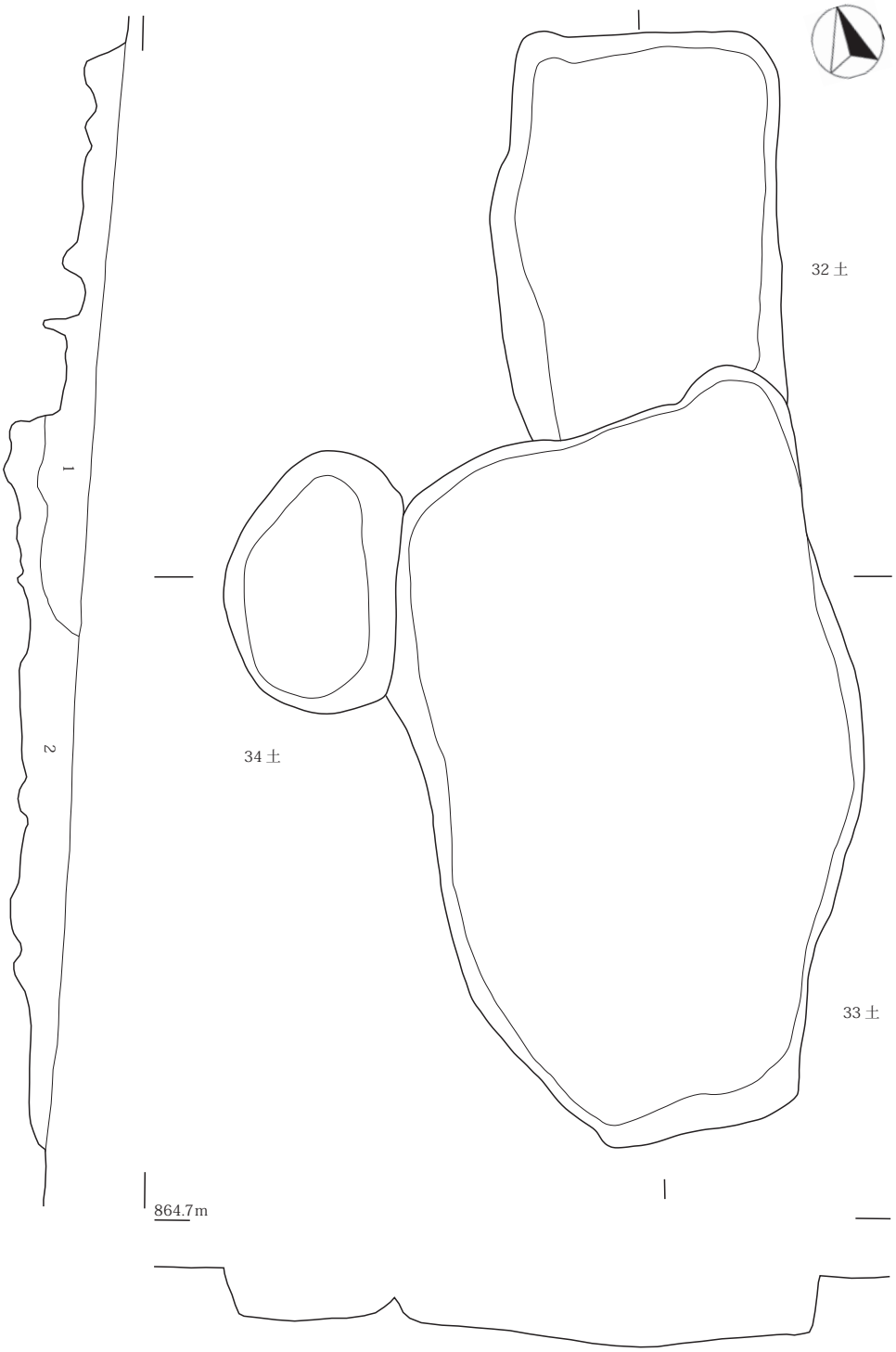
第 33 図　31 号土坑 (1/40)



図版 60　32・33・34 号土坑 (東から)

34 号土坑 (第 34 図、図版 60)

K8d1・2 に位置する。33 号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形で、長径 150㎝、短径 100㎝を測る。



1　暗褐色土　粒子は細かく、よく締まっている。1 ～ 3 ㎝大のロームブロックが入る。
2　黒褐色土　粒子は細かく、よく締まっている。5 ㎜以下のロームブロックを少量含む。

第 34 図　32・33・34 号土坑 (1/40)

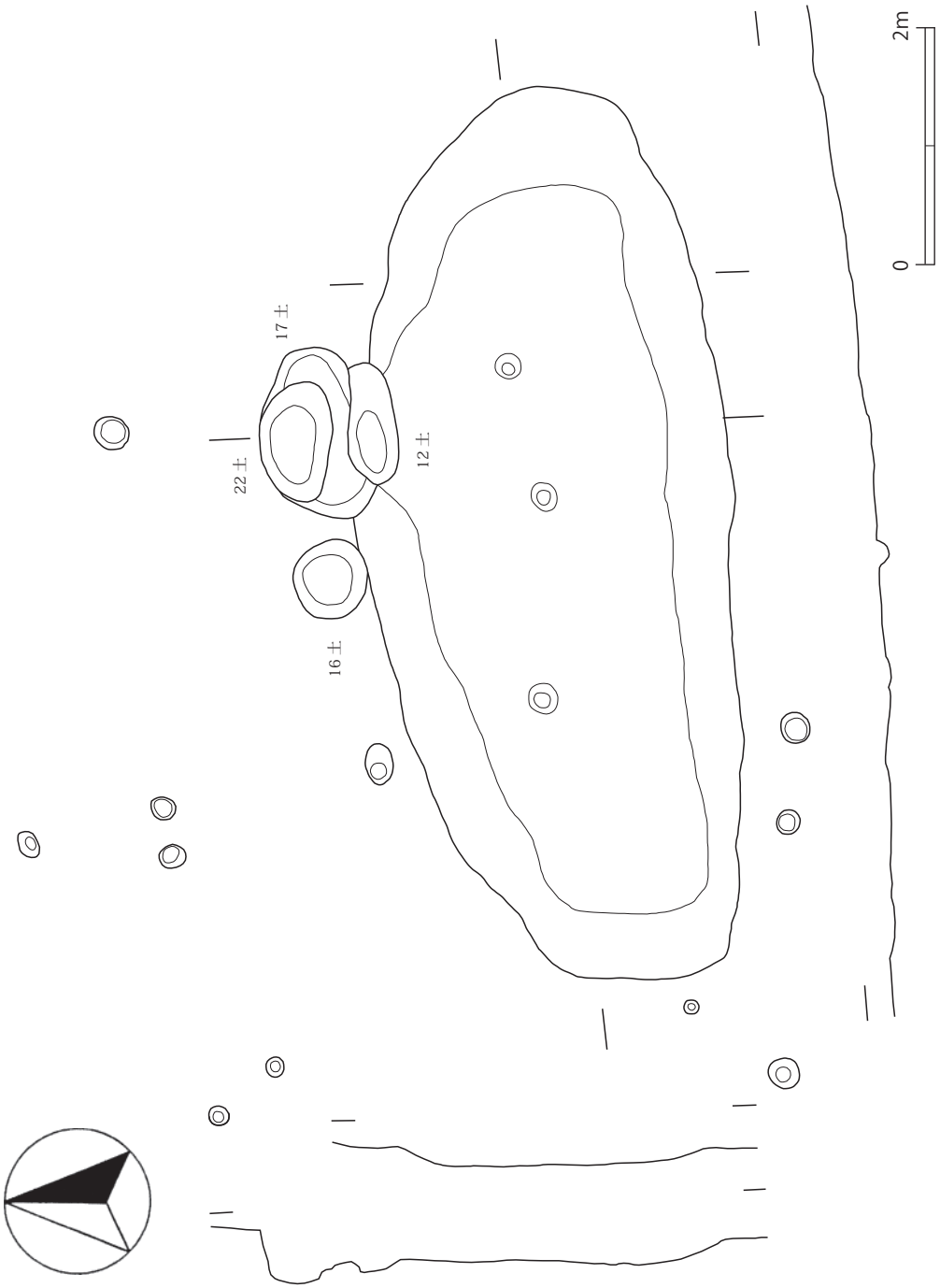
第 3 節　竪穴

1 号竪穴 (第 35 図、図版 61)

F8d4・5 から G8b4 にかけて位置する。北側で 12 号土坑・17 号土坑と重複する。

平面形態は長辺にやや膨らみをもった東西に長い隅丸長方形で、長径 770㎝、短径 330㎝を測る。壁面はなだらかに傾斜し、皿状となる。床面は西に 20㎝ほどの傾斜をもつ。壁面と床面とは断面形からは判別しにくいが、床面は平らでよく踏み込まれた住居址の床面のような硬い面であるため、この範囲をもって床面とした。床面に長軸に沿って、径 20㎝ほどのピットがあるが、本遺構に伴うものかは不明である。

覆土は漆黒の単一層で、粒子は細かいが、締まりはあまりない。



第 35 図　1 号竪穴・12・16・17・22 号土坑 (1/60)

図版 61　1 号竪穴・12・16・17・22・30 号土坑 (東から)

第 4 節　墓坑

1 号墓坑 (第 36 図、図版 62)

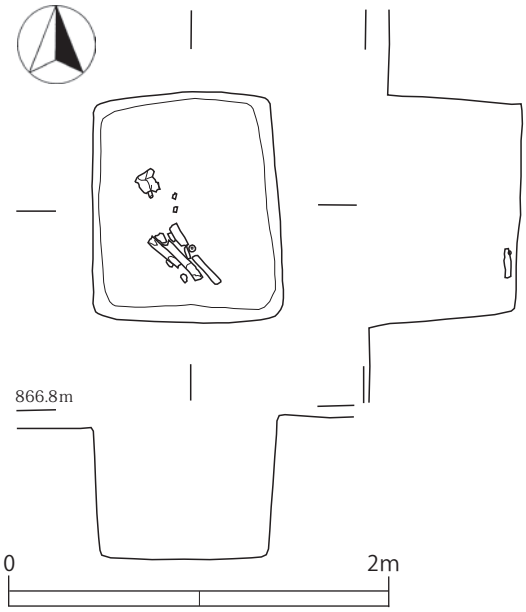
調査区の北端中央の H2e4・5 に位置する。長径 120㎝、短径 100㎝の長方形を呈する。壁はほぼ垂直で、深さは 70 ～ 75㎝ある。底面長径は 110㎝、底面短径は 90㎝を測る。

覆土は拳大のロームブロックを含み、締まりはあまりない。

底面近くまで掘り下げたところ、南側で人間の大腿骨が出土し、中央やや西寄りのところから頭がい骨の一部が出土した。大腿骨の下からは数枚の古銭が癒着した状態で出土したほか、頭がい骨近くからは煙管の吸い口と雁首が出土した。どちらも遺体埋葬に際して副葬されたものと考えられる。

人骨が出土したことから、諏訪地域振興局農地整備課に連絡するとともに、念のため茅野警察署に人骨が出土したことを連絡した。警察からは古銭や煙管が出土していること、丁寧に埋葬されていることなどから、江戸時代のもので、事件性はないとの判断が示された。

諏訪地域振興局で地権者に問い合わせたところ、この辺に墓があることは承知していたが、埋葬者が誰であるかは不明とのことであった。そこで発掘調査を継続し、人骨と遺品については、広田地区の圃場整備の委員会が無縁仏として引き取り改葬することとなった。したがって、遺物等の実測図は掲載できなかった。



第 36 図　1 号墓坑 (1/40)

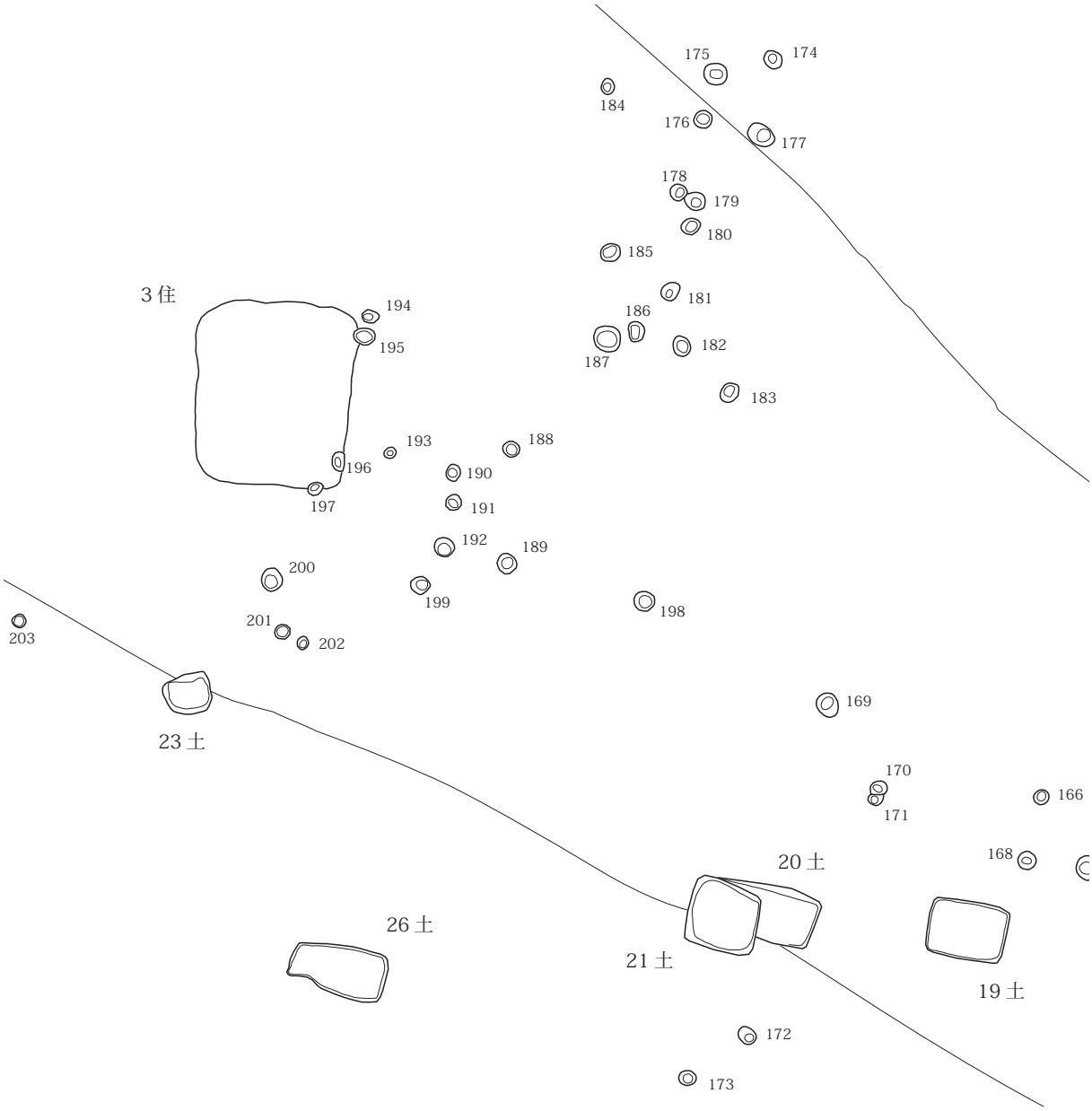
図版 62　1 号墓坑 (北から)

第５節　ピット

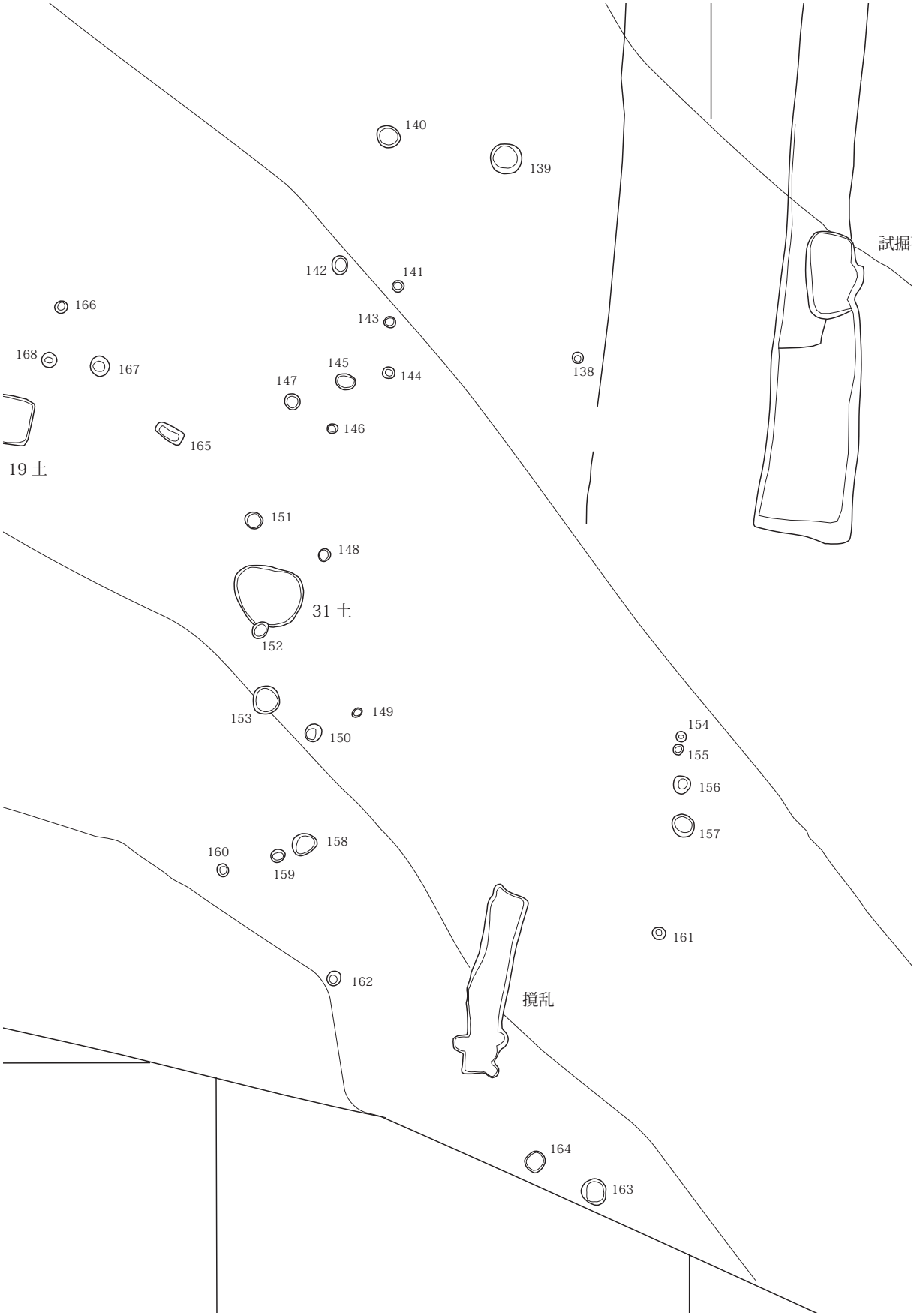
ピットと前述の土坑との明確な区別はない。より小さなものをピットとしたが、調査の過程で土坑としたものの中にもピットとすべきものもあり、逆にピットとしたものの中にも土坑に加えた方が適切であるものもあると思われる。

一覧表での平面形態の分類は、円形と楕円形の違いを長径と短径の比が 1：1.1 以下のものを円形とし、それ以上のものを楕円形とした。また、断面形の分類は、深さが長径の 1/4 以下のものを皿状、長径の 1/2 以下のものをタライ状、長径と同じかそれ以下のものをバケツ状、長径より深いものを筒状とした。

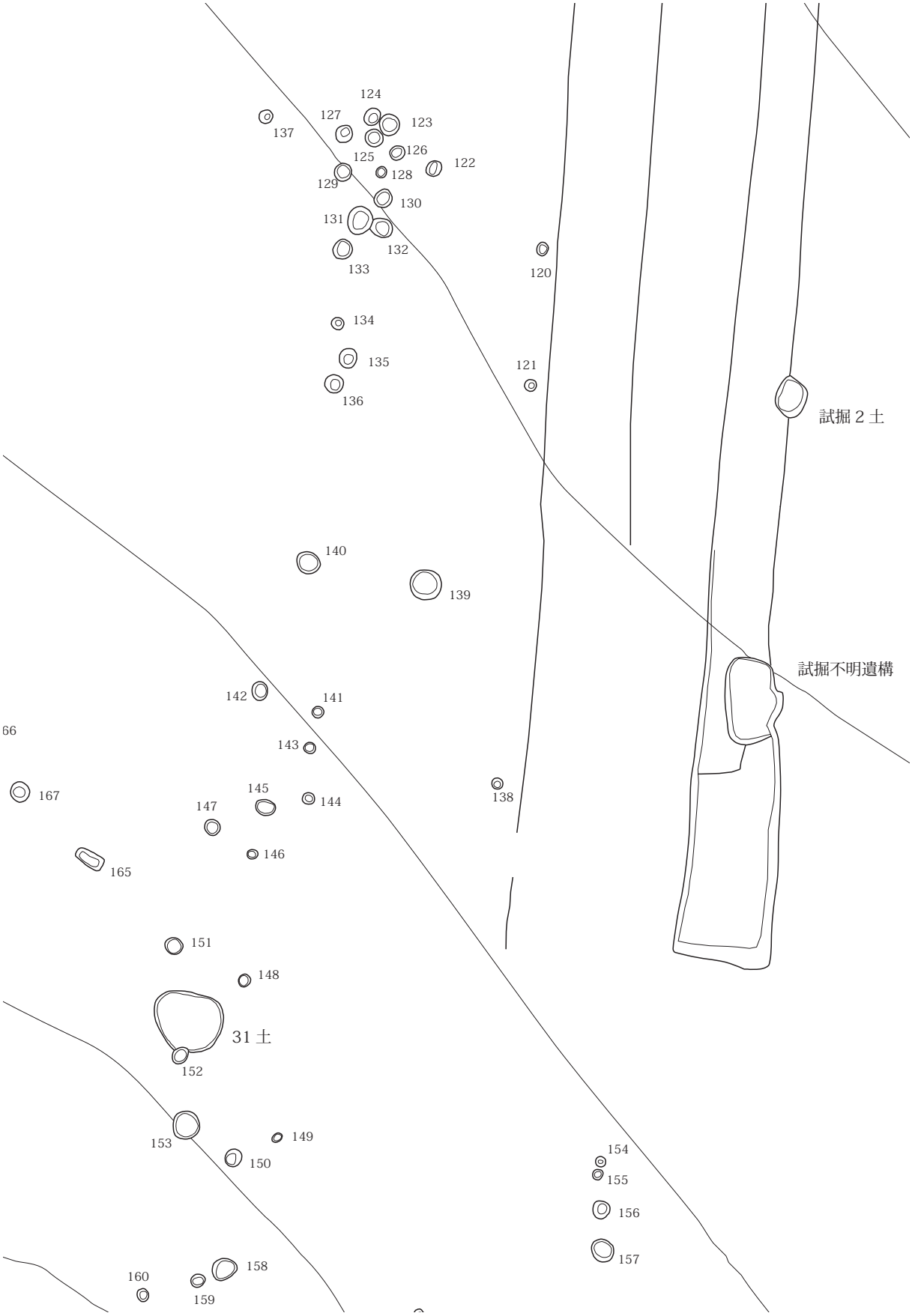
調査経過の項でも記したように、遺跡の北東部分は、尾根の頂部が大きく削平されており、遺構が消滅している可能性が高い。遺跡の南側で多くのピットを検出したが、皿状のもの、タライ状のもの、バケツ状のもの、筒状のものなどが混在する。斜面での検出であるため、深さが異なっていてもセットとなる可能性もある。いくつかのピットの集中も見られるが、これらから建物址の存在を見つけ出すことはできなかった。



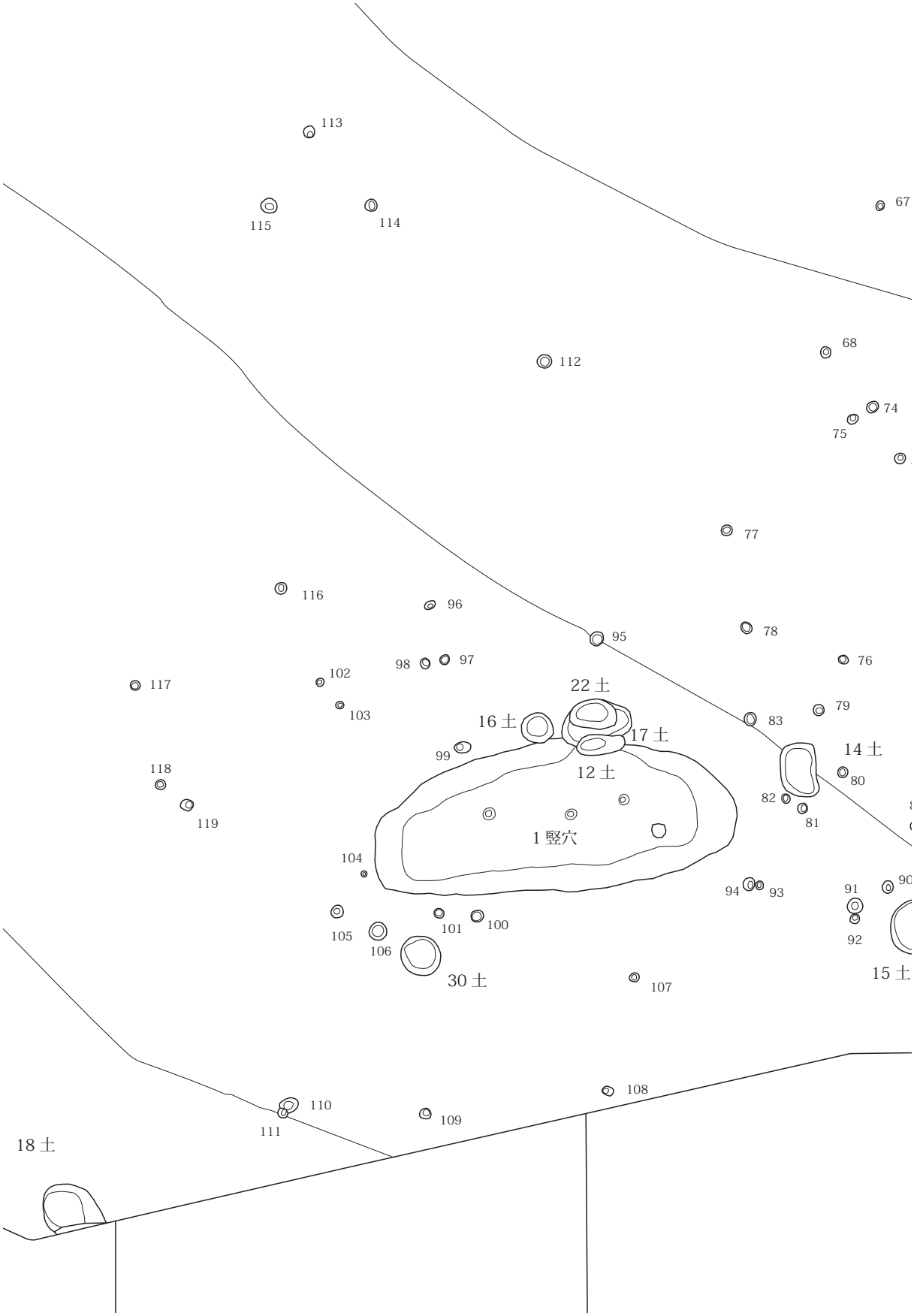
第 37 図　ピット分布図 (1)(1/120)



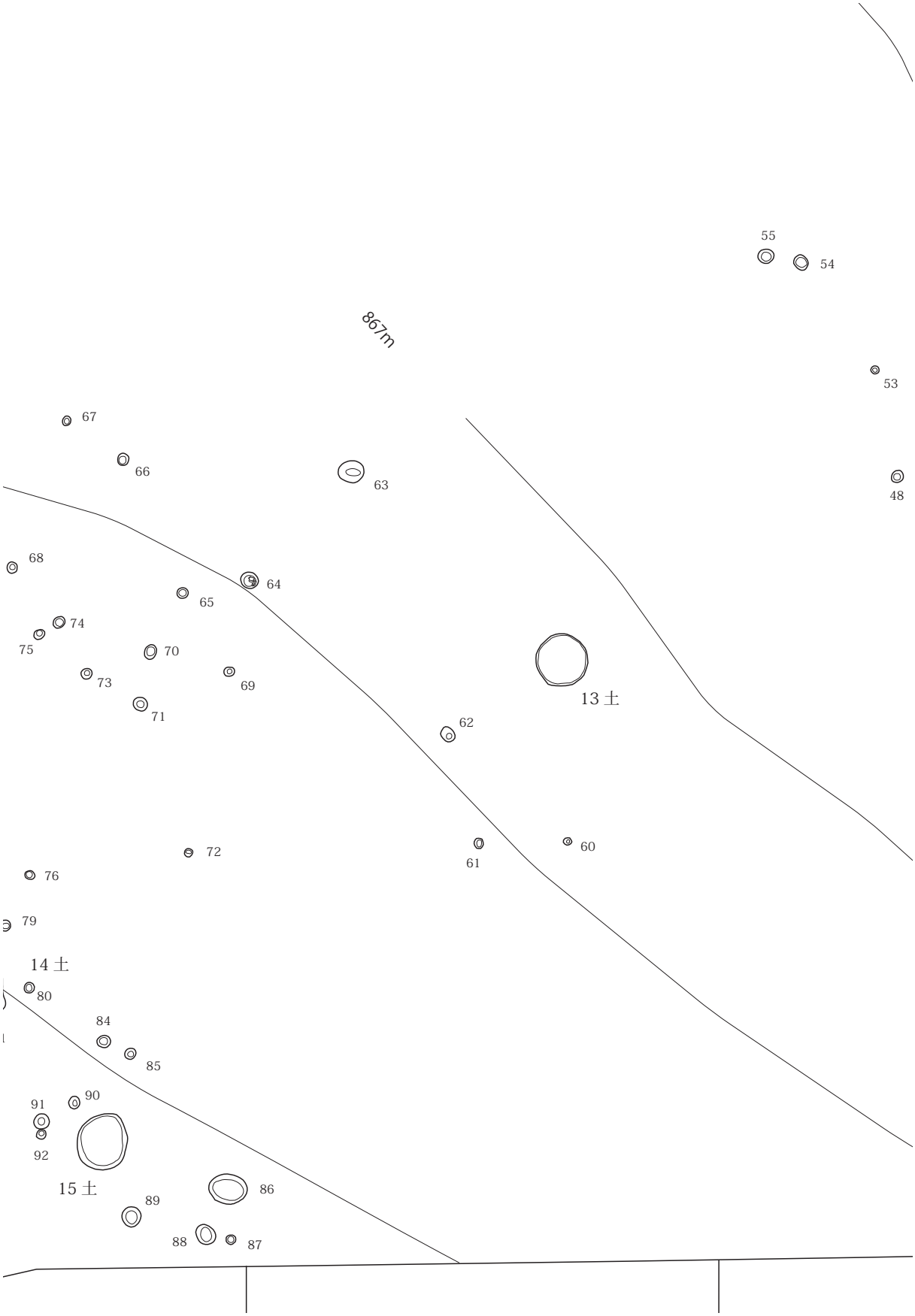
第 38 図　ピット分布図 (2)(1/120)



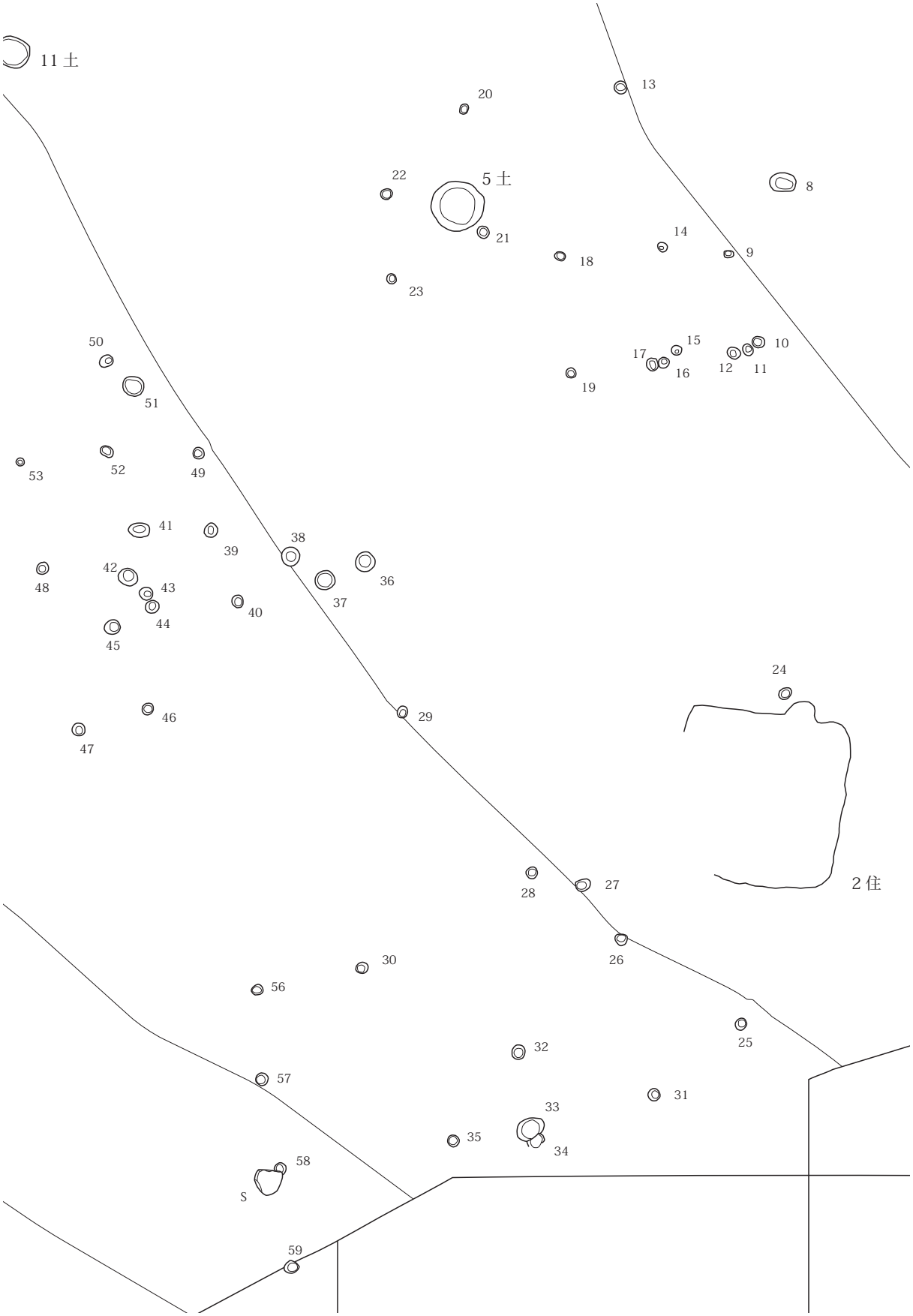
第 39 図　ピット分布図 (3)(1/120)



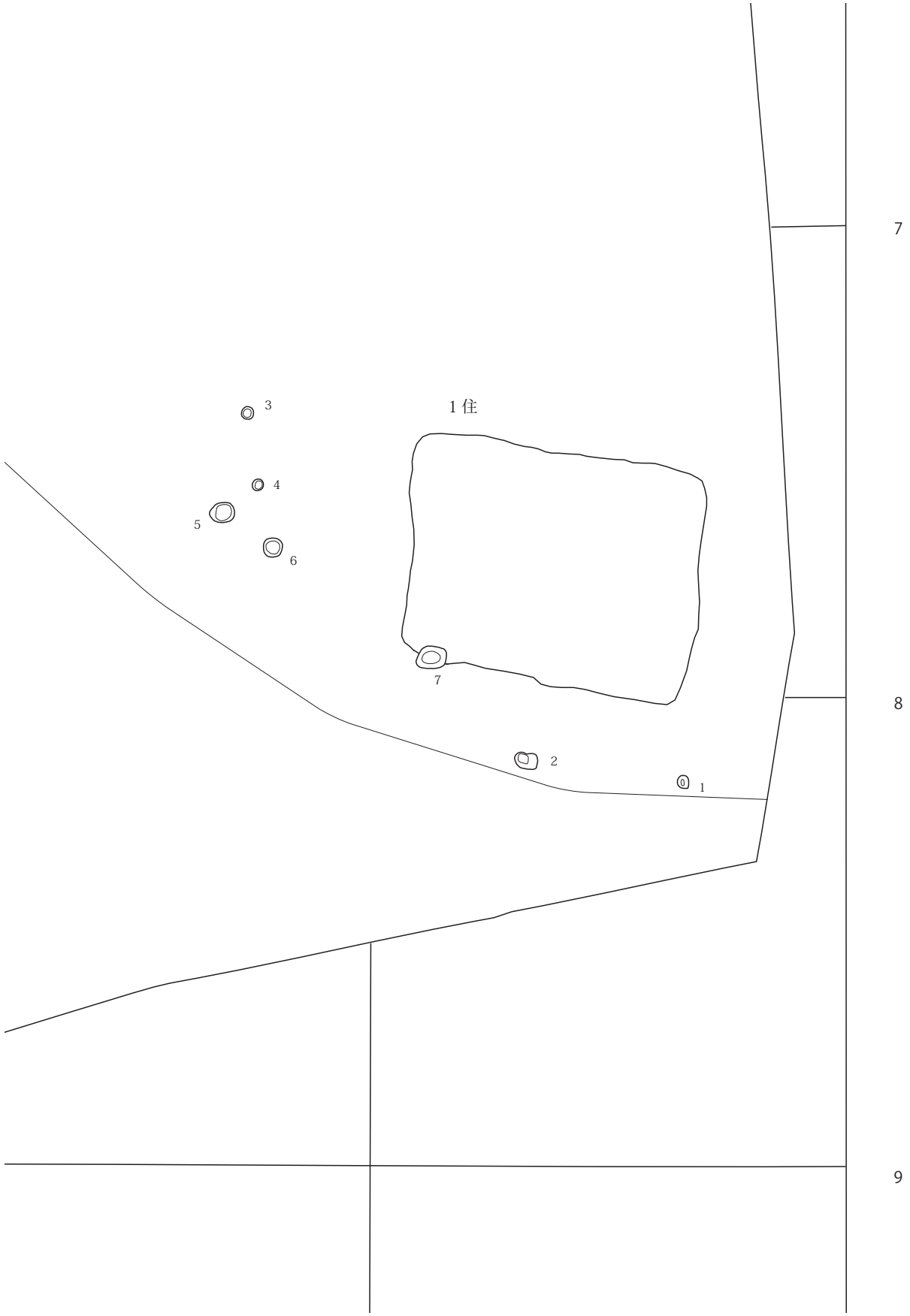
第 40 図　ピット分布図 (4)(1/120)



第 41 図　ピット分布図 (5)(1/120)



第 42 図　ピット分布図 (6)(1/120)



第 43 図　ピット分布図 (7)(1/120)

ピット一覧表

番号	場所	平面形態	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
1	A8b1	楕円形	バケツ状	28	25	20	
2	A8d1	楕円形	バケツ状	48	35	25	
3	B7b2・3	円形	筒状	25	25	46	
4	B7b3	円形	筒状	25	24	40	
5	B7b3・4	楕円形	バケツ状	50	42	37	
6	B7a4・b4	円形	バケツ状	41	40	27	
7	B7e5	楕円形	皿状	62	47	13	
8	C6a5	楕円形	タライ状	55	40	14	
9	C7a1	楕円形	バケツ状	20	15	19	
10	C7a2	円形	バケツ状	26	24	25	
11	C7a2	楕円形	バケツ状	25	22	16	
12	C7a2	楕円形	筒状	28	25	37	
13	C6b4・c4	円形	バケツ状	27	27	21	
14	C7b1	円形	筒状	20	20	46	
15	C7b2	円形	筒状	22	22	45	
16	C7b2	円形	筒状	23	23	25	
17	C7b2	楕円形	タライ状	28	25	10	
18	C7c1	楕円形	バケツ状	23	20	15	
19	C7c2	円形	タライ状	22	21	9	
20	C6d4	楕円形	バケツ状	22	18	20	
21	C6d5	円形	バケツ状	25	25	17	
22	C6e5	円形	バケツ状	25	23	13	
23	C7e1	楕円形	タライ状	22	20	7	
24	C7a5	円形	タライ状	25	23	10	
25	C8a4	円形	筒状	25	24	42	
26	C8b3・c3	円形	筒状	27	25	28	
27	C8c2	楕円形	バケツ状	32	25	25	
28	C8c2	円形	バケツ状	25	25	23	
29	C8e1	楕円形	バケツ状	25	22	19	
30	C8e3	円形	筒状	25	23	26	
31	C8b5	円形	筒状	25	25	31	
32	C8d4	円形	バケツ状	30	28	24	
33	C8c5・d5	楕円形	タライ状	62		27	
34	C8c5	楕円形	バケツ状	37		31	
35	C8d5	円形	筒状	24	24	25	
36	C7e4	円形	バケツ状	42	42	35	
37	D7a4	円形	タライ状	43	41	15	
38	D7a4	円形	バケツ状	40	39	22	
39	D7b4	円形	バケツ状	30	28	18	
40	D7b4	楕円形	筒状	27	23	31	
41	D7c4	楕円形	バケツ状	45	30	24	
42	D7c4	楕円形	バケツ状	42	35	23	
43	D7b4・c4	円形	筒状	27	25	41	
44	D7b4・c4	楕円形	筒状	29	26	38	
45	D7c5	円形	バケツ状	34	31	31	
46	D7b5・c5、D8b1・c1	円形	バケツ状	25	24	25	
47	D8c1	円形	バケツ状	25	25	19	
48	D8d4	円形	筒状	25	25	30	
49	D7b3	円形	筒状	25	24	27	
50	D7c2	楕円形	バケツ状	29	24	26	
51	D7c2	楕円形	バケツ状	45	40	29	
52	D7c3	楕円形	バケツ状	29	22	23	

ピット一覧表

番号	場所	平面形態	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
53	D7d3	円形	バケツ状	17	16	10	
54	D7e2	楕円形	タライ状	33	28	13	
55	D7e2	楕円形	タライ状	34	30	9	
56	D(a3・a4	楕円形	筒状	25	22	39	
57	D8a4	円形	筒状	27	25	38	
58	D8a5	楕円形	筒状	28	25	32	
59	D9a1	楕円形	タライ状	33	28	13	
60	E8b3	楕円形	バケツ状	18	15	11	
61	E8c3	楕円形	バケツ状	22	18	12	
62	E8c2	楕円形	バケツ状	33	25	21	
63	E7e4	楕円形	バケツ状	56	47	39	
64	F7a5	楕円形	タライ状	38	34	10	土器
65	F7a5・b5	円形	バケツ状	23	23	15	
66	F7b4	円形	タライ状	26	24	13	
67	F7c4	楕円形	バケツ状	20	18	20	
68	F7c5	楕円形	バケツ状	25	21	25	
69	F8a1	楕円形	バケツ状	23	18	12	
70	F8a1・b1	楕円形	筒状	32	25	54	
71	F8b1	楕円形	筒状	31	28	40	
72	F8a3	円形	バケツ状	18	18	11	
73	F8b2	円形	筒状	23	23	24	
74	F8b1・c1	楕円形	バケツ状	27	23	21	
75	F8c1	楕円形	筒状	23	20	29	
76	F8c3	楕円形	筒状	21	19	25	
77	F8d2	円形	バケツ状	23	23	14	
78	F8d3	楕円形	タライ状	26	22	8	
79	F8c4	円形	筒状	23	23	26	
80	F8c4	円形	バケツ状	23	21	18	
81	F8c5	楕円形	筒状	22	20	28	
82	F8c5	楕円形	筒状	20	17	28	
83	F8d4	楕円形	タライ状	28	25	14	
84	F8b5	円形	バケツ状	29	27	22	
85	F8b5	楕円形	タライ状	25	22	9	
86	F9a1・a2	楕円形	皿状	81	63	11	
87	F9a2	円形	バケツ状	20	20	19	
88	F9a2	楕円形	タライ状	44	38	14	
89	F9b2	円形	皿状	43	40	10	
90	F9b1	楕円形	タライ状	26	23	13	
91	F9c1	円形	バケツ状	32	32	21	
92	F9c1	円形	バケツ状	20	20	15	
93	F9d1	楕円形	タライ状	20	16	10	
94	F9d1	楕円形	バケツ状	27	23	20	
95	F8e3	円形	バケツ状	29	29	16	
96	G8b3	楕円形	タライ状	25	17	7	
97	G8b3	楕円形	皿状	22	19	4	
98	G8b3	楕円形	バケツ状	23	20	16	
99	G8b4	楕円形	皿状	34	23	8	
100	G9b1	円形	バケツ状	25	25	15	
101	G9b1	円形	バケツ状	21	21	21	
102	G8c3	円形	バケツ状	18	17	16	
103	G8c4	円形	バケツ状	17	16	11	
104	G8c5・G9c1	円形	バケツ状	13	13	10	

ピット一覧表

番号	場所	平面形態	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
105	G9c1	円形	バケツ状	26	26	16	
106	G9c1	円形	タライ状	37	37	13	
107	F9e2	円形	バケツ状	20	19	20	
108	F9e3	楕円形	バケツ状	23	18	21	
109	F9b3	円形	バケツ状	25	23	19	
110	G9d3	円形	タライ状	40	331	13	
111	G9d3	円形	バケツ状		21	12	
112	G7a5	円形	バケツ状	27	26	18	
113	G7c3	円形	筒状	21	20	27	
114	G7c4	円形	筒状	24	22	26	
115	G7d4	楕円形	バケツ状	32	28	26	
116	G8d2・d3	円形	バケツ状	23	23	21	
117	G8e3・e4	円形	タライ状	20	20	7	
118	G8e4・e5	円形	バケツ状	21	21	15	
119	G8e5	楕円形	バケツ状	27	23	17	
120	I6a3	楕円形	バケツ状	29	21	24	
121	I6a4	円形	タライ状	26	25	13	
122	I6b1・b2	楕円形	筒状	35	30	80	
123	I6c1・c2	円形	タライ状	45	44	22	
124	I6c1・c2	楕円形	バケツ状	39	32	21	
125	I6c2	円形	バケツ状	38	38	25	
126	I6c2	楕円形	バケツ状	33	29	18	
127	I6c2	円形	バケツ状	39	36	30	
128	I6c2	円形	タライ状	25	23	8	
129	I6c2	円形	バケツ状	38	36	20	
130	I6c2	楕円形	タライ状	40	35	18	
131	I6c2・c3	楕円形	タライ状	60	52	24	
132	I6c3	楕円形	タライ状	48	40	15	
133	I6c3	円形	タライ状	43	41	18	
134	I6c4	円形	筒状	26	26	29	
135	I6c4	楕円形	バケツ状	42	37	26	
136	I6c4	円形	バケツ状	40	39	27	
137	I6d1	円形	バケツ状	30	29	26	
138	I7b3	円形	タライ状	24	24	12	
139	I7b1・c1	円形	タライ状	65	64	21	
140	I7d1	楕円形	皿状	52	45	8	
141	I7d2	円形	タライ状	25	25	10	
142	I7d2	楕円形	タライ状	40	33	19	
143	I7d3	円形	タライ状	25	24	11	
144	I7d3	楕円形	タライ状	27	24	12	
145	I7d3	楕円形	タライ状	43	34	20	
146	I7d4	楕円形	バケツ状	23	20	12	
147	I7e3・e4	円形	タライ状	35	34	13	
148	I7d5	円形	タライ状	28	27	12	
149	I8d2	楕円形	バケツ状	24	18	15	
150	I8d2・e2	楕円形	バケツ状	40	35	26	
151	I7e5	円形	タライ状	38	35	12	
152	I8c1	楕円形	皿状	41	32	10	
153	I8e2	円形	皿状	60	57	12	
154	I8a2	円形	タライ状	22	22	10	
155	I8a2	円形	タライ状	23	22	10	
156	I8a2・a3	円形	タライ状	38	36	14	

ピット一覧表

番号	場所	平面形態	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
157	H8e3・I8a3	楕円形	皿状	50	45	11	
158	I8d3・e3	楕円形	タライ状	53	45	18	
159	I8e3	楕円形	バケツ状	31	28	17	
160	I8e3	楕円形	バケツ状	28	24	15	
161	I8a4	円形	タライ状	28	26	11	
162	I8d5	円形	バケツ状	31	30	18	
163	I9a2・b2	円形	タライ状	57	52	15	
164	I9a1・a2	楕円形	タライ状	44	40	18	
165	J7a4	楕円形	タライ状	62	40	17	
166	J7b2・b3	円形	バケツ状	27	27	22	
167	J7b3	円形	皿状	43	40	3	
168	J7b3	円形	バケツ状	32	30	28	
169	J7d2	楕円形	バケツ状	44	37	32	
170	J7d2	楕円形	バケツ状	30	26	20	
171	J7d2・d3	円形	皿状		25	10	
172	J7e5	楕円形	筒状	34	27	40	
173	J7e5	楕円形	バケツ状	31	27	17	
174	J6d1・e1	楕円形	筒状	34	30	46	
175	J6e1	楕円形	バケツ状	42	38	27	
176	J6e1・e2	楕円形	バケツ状	34	30	30	
177	J6e2	楕円形	タライ状	50	37	23	
178	J6e2	円形	バケツ状	30	30	20	
179	J6e2	楕円形	バケツ状	36	31	22	
180	J6e2	楕円形	バケツ状	35	28	24	
181	J6e3・K6a3	楕円形	バケツ状	35	29	20	
182	J6e3・e4	楕円形	タライ状	35	30	17	
183	J6e4	楕円形	バケツ状	38	30	21	
184	K6a1	楕円形	筒状	28	23	31	
185	K6a3	円形	バケツ状	35	32	19	
186	K6a3	楕円形	バケツ状	35	28	22	
187	K6a3・a4	円形	バケツ状	46	44	33	黒曜石
188	K6b4	円形	タライ状	29	28	13	
189	K6b5	円形	タライ状	35	33	16	
190	K6b5	楕円形	バケツ状	30	27	17	
191	K6b5	楕円形	タライ状	28	25	13	
192	K6b5・c5	円形	バケツ状	35	33	19	
193	K6c4	楕円形	バケツ状	22	18	12	
194	K6c3	楕円形	タライ状	33	23	14	
195	K6c3	楕円形	タライ状	39	30	13	
196	K6c4・c5	楕円形	タライ状	33	21	11	
197	K6d5	楕円形	タライ状	28	20	11	
198	K7a1	円形	タライ状	37	36	18	
199	K7c1	円形	タライ状	34	32	10	
200	K6d5・K7d1	楕円形	タライ状	40	34	18	
201	K7d1	円形	バケツ状	27	25	18	
202	K7d1	楕円形	タライ状	24	20	10	
203	L7a1	円形	バケツ状	25	25	17	

第 4 章　まとめ

第 1 節　ツキノ木遺跡の範囲について

ツキノ木遺跡は、平安時代の土師器、中世の内耳土器が採集されたことにより、遺跡として登録されていたが、調査歴がなく、実態のわからない遺跡であった。

茅野市遺跡分布図 (平成 19 年 3 月改定) では、今回調査を行った台地の南側の、かつて水田や畑地として利用されその後休耕となっていた個所が遺跡範囲として括られていた。この地を含む一帯で県営ほ場整備が計画されたため、実態を解明すべく、平成 27 年に地権者から同意の得られた 2 筆について試掘調査を行った。調査の結果、中世の青磁破片が出土したものの遺構は検出されず、北側の堰から浸みだす水によって水没してしまう状態であった。こうした状況から、遺跡の実態は当初遺跡として括られていた谷部ではなく、台地の上にあり、出土した遺物は、その堰の北側の台地からの流出によるのではないかと推察された。

そこで、翌年の平成 28 年に、地権者から同意の得られた 1 筆について試掘調査を行った。試掘調査は 2 本のトレンチを南北にあけることにより実施した。この結果、台地の中央付近で 2 基の土坑が検出された (報文中の試掘 1 号土坑および 2 号土坑) ほか、南側で性格不明の遺構 4 基が重複する形で検出された。この調査結果を受け、ツキノ木遺跡の範囲変更届けを長野県教育委員会に提出するとともに、長野県諏訪地域振興局と協議を行い、平成 29 年度に発掘調査を実施することとなった。

変更したツキノ木遺跡の範囲は、今回のほ場整備に掛かる範囲の東端から西へ 120 mまで、南北は北端から台地南側の堰までとした。遺跡の面積および調査面積は 7,600㎡である。なお、調査区の西側は、耕作のため一段低くなっており、遺構の検出が望めないと考えられたため範囲外とした。東側については、宅地や商業地として開発が行われてしまっており、表面採集などが行えない状況である。大きな造成は行われていないため、遺跡が広がっている可能性があるため、今後の再開発などの計画に注視していく必要がある。

第 2 節　平安時代の集落について

ツキノ木遺跡からは、3 軒の平安時代の住居址が検出された。1 号住居址と 2 号住居址は調査区の東端にあり、2 軒の間隔も 10 mと近い。住居の規模やカマドの位置が異なっており、同時存在したかは不明であるが、出土した土師器や灰釉陶器などをみると、ほぼ同時期になるものと思われる。

一方、3 号住居址は調査区の西端にあり、80 m以上の間隔をもつ。遺構を検出した段階で床面が現れ、ほぼ覆土がなくなっていたため遺物の出土が少なく、時期がはっきりしないが、土師器の坏など 1・2 号住居址とさほど違いが見られない。高台付の皿は高台部か欠損しているが、高脚の高台付盤になると思われ、一段階新しい様相を示す可能性もある。八ヶ岳山麓に多くみられる平安時代の集落は、このように尾根の南斜面に一列に並ぶように点在することが多いが、この 2 号住居址と 3 号住居址の間隔はこうした典型的な集落と比較しても、離れているといえる。前述の遺跡の範囲でも述べたが、調査区の西側は削平され一段低くなっており、遺構の検出が望めないため遺跡の範囲や調査の対象から外したが、こちらに同時期の住居址が連なっていた可能性もある。

1 号住居址のカマドについて

カマドは東壁の北隅にある。天井石や袖石は床面から浮いており、中に焼土が混じり壊された状態であった。表土剥ぎの時に出土した灰釉陶器の皿は、このカマドの上に乗る形で出土した。また、カマド内からは甕ではなく、土師器の坏などが出土している。カマドの両脇には礫を抜き取った痕跡が認められる。しかし、火床面と考えられる位置に焼土は検出されなかった。一方、床面が焼け、焼土となっている痕跡が確認されたのは北壁の東隅で、8㎝の厚さがあった。袖石や壁から張り出した煙道の痕跡などは検出できなかったが、当初北壁の東隅にあったカマドを東壁の北隅に作り直しているようにも見えるが、カマドの利用期間がそれほど長くなかったのであろうか。東壁のカマドの脇の P5 の覆土からは焼土ブロックや焼土粒子が混じるなど、カマドの廃絶に伴って新たにカマドを構築したとも思われない。

2 号住居址のカマドについて

カマドは北壁の中央よりやや東に寄ったところにある。天井石、袖石は比較的良く残っていたが、煙道に至る天井石は残っていなかった。また、支脚は柱状の礫を用いており、抜かれることなく残っていた。その支脚に土師器の坏が、あたかも竈神を鎮めるかのように被せた状態で検出された。竈の廃絶に伴う祭祀の一例となろう。

2 号住居址出土の金肌について

2 号住居址のほぼ中央に P13 があり、鍛冶の際に出る金肌が出土している。土中を掘り下げながらの回収であり、量は少ないが、本住居址が鍛冶に関わる住居であることを窺わせる。P13 の上部に床に食い込むような平らな自然石が置かれていたが、金床石になる可能性もある。

一方、刀子や鉄滓が出土している 1 号住居址からも鉄肌が出土していたことが判明しているが、古いブルーシートが傷んで破れた砕片だろうとのことで廃棄してしまった。近接した 2 軒の住居址から、鍛冶に関わる資料が出土していることは興味深い。

第 3 節　土坑・ピットについて

土坑は 32 基が検出されている。遺物の出土がなく、時期を明らかにできるものはない。

土坑のうち、平面形態が隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するものが 8 基ある。このうち、長軸方向が東西に長いものは 19 号土坑、20 号土坑、24 号土坑、26 号土坑の 6 基で、長軸方向が南北に長いものは 25 号土坑と 32 号土坑の 2 基である。24 号土坑は坑底の四隅と長軸の中間にピットがみられ、他の土坑とは性格が異なっている。ピットの配置からこの土坑に付属するものと考えられ、柱を伴う遺構であると考えられる。

平面形態が円形の土坑は、13 号土坑のように掘り込みがしっかりしていて断面形がタライ状となるものが代表である。深さが浅い 3・5・7・8・9・10・15・31 なども上面が削平されてしまっているが、同様の形態を示すものであったろう。

遺跡の東 1 ／ 3 ほどが水田として利用されており、尾根の頂部が造成により削られていることを考えると、遺構の数はもっと多かったと推測できる。

遺構の時期については、八ヶ岳山麓に多い縄文時代の遺構や遺物がほとんど見られないことから、住居址が検出されている平安時代か、それ以降のものである可能性が高い。2 年に亘る試掘調査で青磁が出土していることから、該期の遺構の可能性もあるが、遺物の出土がないため特定できない。

かつて茅野市宮川田沢の神垣外遺跡や茅野市米沢の八幡坂遺跡などでも同様の土坑が検出されたが、この 2 遺跡については多少なりとも遺物の出土があり、また地下式坑など明らかに中世の遺構が存在していた。こうしたことから、神垣外遺跡では隅丸長方形の土坑について中世の墓坑を想定したが、本遺跡については遺物の出土がなく、遺構の性格も不明とせざるをえない。

多数出土したピットについては、建物址となる可能性も考え様々な検討を行ったが、集中している個所はあるものの、建物址を特定することはできなかった。また、水田により削平されている個所にも存在していた可能性があるが、数も多く、セット関係を見出すことはできなかった。

参考文献

堤　　隆　1991「住居廃絶時における竈解体をめぐって－竈祭祀の普遍性の一側面－」『東海史学』第二十五号
小林深志　1992『神垣外遺跡－団体営土地改良総合整備事業田沢地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』茅野市教育委員会
小林深志　1998『八幡坂遺跡－平成 9 年度県営圃場整備事業米沢地区に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』茅野市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	つきのきいせき
書　　名	ツキノ木遺跡
副　書　名	平成29年度　県営中山間総合整備事業　縄文の里地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小林深志
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所　在　地	〒391－8501　長野県茅野市塚原二丁目6番地1号　℡0266－72－2101
発行年月日	西暦2019年3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つきのき ツキノ木	ちのしたまがわ 茅野市玉川	20214	299	35° 59″ 36′	138° 10′ 54″	2017.7.3 ～ 2017.10.31	7,600㎡	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
つきのき ツキノ木	集落	平安時代	住居址　3軒	土師器・灰釉陶器 刀子・砥石 銅製金具	・平安時代の住居址からは、鉄滓の他金肌も出土し、鍛冶に関わる住居であることが確認された。
		時期不明	土坑　34基 竪穴　1 ピット　203		
		近世	墓坑　1基	煙管、古銭	

要約	台地の頂部は水田による造成で削平されていたが、南側斜面を中心に遺構の検出ができた。 土坑やピットは中世のものと推測されるが、遺物の出土がないため明確にできない。

ツキノ木遺跡

－平成 29 年度　県営中山間地総合整備事業
縄文の里地区　埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 31 年 3 月 10 日　印刷
平成 31 年 3 月 10 日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　長野県茅野市塚原二丁目 6 番 1 号（0266）72 － 2101(代)
印刷　伸和産業株式会社　　長野県茅野市中大塩 17 番地 33